

静岡大学

地域課題解決支援プロジェクト成果報告書

第10号

目次

成果報告書第10号の刊行にあたって	
地域課題解決支援プロジェクトの概要	3
地域課題一覧	
公開シンポジウム「地域課題をめぐる取り組みの持続可能性を考える」	9
松崎町の持続可能なまちづくり	
伊豆半島における地域づくりの課題と可能性～南伊豆町伊浜地区の取組事例～	
伊豆稲取における地域の持続モデルづくり～人口減少地域の課題と可能性～	
みんなのチャレンジ基地ICLaの挑戦～「やってみよう!」があふれる静岡(2023年度方針)～	
株式会社こども会議(仮)の挑戦～こども達の「できる!」を社会の中に～	
しずおかキッズカフェ	
パネル・ディスカッション	
地域課題解決支援プロジェクト・各地の進捗状況	45
調査報告「ワーカビリティを意識した	
地域の活性化・ブランディングに関する民俗学的・地理学的研究」	49
地域創造教育センターと地域課題解決支援プロジェクト	

静岡大学地域創造教育センター

2025

成果報告書第 10 号の刊行にあたって

静岡大学学長
日詰 一幸

本学は、令和6年度に創立75周年を迎えました。8年前の平成29年に「地域志向大学」宣言を行いました。地域志向という方針は、創立以来の本学の精神を継承し発展させるものであり、地域に根差した大学という本学の方向性を改めて確認するものでした。本学にとって、地域連携・社会貢献は、これまでも、またこれからも変わらず果たすべき役割となっています。



平成23年度に学生・教職員が地域社会と協働で取り組む地域活性化活動を支援する「地域連携応援プロジェクト」を開始し、今年度までのべ238件の応募に対し、これまで177件を採択して支援を行ってきました。平成25年度からは、これまで大学との接点がない地域からも広く課題を公募する「地域課題解決支援プロジェクト」を立ち上げました。これまでに県内各地から計43件の応募をいただき、提案地域を訪ね聞き取りを行った上で地域課題データベースを公開しています。そして、興味・関心を持った教職員・学生とのマッチングをはかり、継続的に課題解決に取り組んでおります。コロナ禍によって活動を見合わせる時期もありましたが、10年以上にわたって取り組んでいる課題もあります。これらの取り組みの成果が積み上がり、このほど成果報告書第10号を刊行する運びとなりました。

地域課題解決支援プロジェクトのシーズが結実したものの一つには、地域創造学環の必修授業である「フィールドワーク」があります。平成28年に始まった地域創造学環のフィールドワークは令和6年度をもって終了となりますが、その一部は、令和5年度に開設したグローバル共創科学部の「コラボラティブワークス」へと引き継がれています。今年度はとりわけ、地域課題解決支援プロジェクトの選定地域になっている伊豆半島地域および藤枝市において、学生・教職員が訪問し、地域の課題解決支援プロジェクトに取り組みました。

プロジェクトの主な担い手は各学部・地域創造学環・グローバル共創科学部の学生・教職員ですが、初期から参画した静大フューチャーセンター、最近では令和2年に立ち上がった未来社会デザイン機構、東部サテライト「三余塾」が大きな役割を果たしています。東部サテライトが立地する伊豆市、「2030 松崎プロジェクト」を進める松崎町など、様々な課題が山積する伊豆半島地域で活動を展開しながら、大学が地域の自治体や企業、地元の高校とも連携し、これからの地域のあり方を考えています。そうして得られた経験と知見は、東部サテライトが伊豆半島ジオパークと共催した「伊豆半島探究学習サミット&伊豆半島ジオパーク学術研究助成発表会」を通じて、オール伊豆半島の方々と共有しました。また、同じ半島地域を持つ和歌山大学との共同研究フォーラムも5年目を迎え、「半島から広がる可能性」をテーマに議論しました。

大学の構成員が恒常的に社会連携・地域貢献活動に携わることで、教育・研究のあり方が深化・拡充し、次なる社会連携につながる循環をつくることを本学は目指しています。今回の報告書で取り上げた種々の取り組みもようやく地域に根付こうとしているところですが、ご一読の上、ご助言、ご示唆を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

地域課題解決支援プロジェクトの概要

「地域課題解決支援プロジェクト」は、地域社会が抱える課題を大学が再発見し、大学のもつ様々な資源を活かしながら地域と大学が連携し、対応策をともに考え、協働することによって課題解決を支援する事業です。大学と地域との新たな連携を立ち上げるべく、これまで大学と接点がなかった地域や団体も含め、広く学外から地域課題を公募し、県内全域から27件（準備不足のため辞退された1件を除く）の応募があり、重点的に取り組む課題群をモデル事業として取り組みました。

モデル事業以外の課題についても、提案地域に赴いてヒアリングを行い、地域課題データベースとして学内外に広報し、興味関心をもつ教職員・学生とのマッチングをはかってきました。

第1期の地域課題に取り組む中で、継続的に地域とかわった学生たちの成長がみられました。そこで、これまでの地域課題に引き続き取り組みながら、平成28年度には第2期公募として、継続的に学生を受け入れていただける地域課題の募集を行い、全15件の課題が寄せられました。

寄せられた42件の提案課題については、ウェブサイトにて一般公開中であり、学内では各研究室・学生とのマッチングを進めています。学内外を問わず、各課題にご協力いただける研究室・教職員・学生・その他関係機関の皆様は、当センターまでご連絡ください。担当者がコーディネートをいたします。

- ・ウェブサイト URL： http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies_index.html
- ・連絡先： TEL 054-238-4817、 E-mail： kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp

地域課題一覧

《第1期》

No	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
1	夢の里みつかわあぐりい（袋井市）	三川地区の課題は、『三川が誇る3つの財産（農業・環境・人）をより合わせ、欲しい、行きたい、住みたい地区を創る』こと。人との絆を大切に、心通い温もりのあるまちづくりに取り組みたい。	①出会いの場の提供をし、結婚する人を増やす方策 ②袋井市地域の活性化方策 ③地産地消の推進のための方策
2	御前崎市役所	御前崎市では過去の人口増加を背景に、原子力関連交付金等により公共施設の整備を進めたが、少子高齢化や人口減少により公共施設のあり方が変化した。公共施設マネジメントへの取組が必要である。	①今後の当市の財政状況分析 ②公共施設マネジメントの可能性及び取組手法 ③公共施設の費用便益分析
3	ユークロニア株式会社（静岡市）	県内の小中学校では睡眠不足からくる問題が顕在化している。「睡眠授業」の依頼が増えているが、研修にはマンパワーが不足。地域の課題として睡眠を整えることができる仕組み作りが必要である。	①睡眠教育の標準化や効果検証 ②教育者の育成 ③静岡独自の睡眠問題の調査により、地域にあった生活スタイルを探る。
4	NPO複合力（静岡市）	両河内地域の高齢化は進み、休講農地が増えている。森林公園「やすらぎの森」は、老朽化にもかかわらず年間30万人が訪れる。脱・限界集落の手がかりを得て、地域を活性化する手立てを考えたい。	①農産物の品質を高め、商品化する栽培知識技術。竹林等を伐採し、循環型資源とする知識技術。 ②グリーンツーリズムを活性化するための知識技術 ③大学生など若いマンパワーが恒常的に来園する方策
5	静岡市北部生涯学習センター美和分館	潜在的な利用者ニーズの把握が十分ではない。広く地域住民の生涯学習に対するニーズ把握のため調査を企画した。それにより、一層充実した学びの機会を地域に提供し、地域コミュニティ活動の推進につなげたい。	地域住民に対するアンケート調査への助言及び分析

6	静岡市立登呂博物館	リニューアルオープン後、年々来館者数が減少している。イメージ・キャラクターを使った誘客活動を行ってきたが、マンネリ状態になっている。また、多様化する来館者に対応するため、多言語仕様の資料が必要となる。	①イメージキャラクターを活用した教育普及事業の開催への支援。 ②登呂遺跡および登呂博物館の概要を紹介した多言語対応パンフレットの作成とHPの構築
7	NPO法人 富士川っ子の会 (富士市)	子育て支援中心の活動を、今後は生涯学習の観点から事業を広めていく必要がある。当NPO、行政、企業が協働できるようなテーマで解決を図る活動を展開する。活動拠点の確保、会員の若返り施策と後継者の育成が課題。	①当団体、行政、企業との協働により、団体の若返りと活動の幅を広げ、定款に示す事業展開の具体化。 ②活動拠点の確保。
9	袋井市三川自治会連合会	高齢者が地域社会に飛び出せない、“生き甲斐や社会貢献”の機会が確保できない。	①高齢者の意識調査 ②高齢者のライフスタイルの解析 ③高齢者の社会進出の仕掛けづくり ④全国での成功(失敗)事例の紹介 ⑤街づくりワークショップ等への共同参加
10	南伊豆新生機構 (南伊豆町)	①未利用の土地の有効活用がされていない。 ②地場産業が稼働していないため人口が流出している。 ③人材が育っていないため、外部の人材との交流がうまくできていない。 ④行政の協力体制がない。	①知的アドバイスの支援 ②人材の支援 ③資金の支援
11	焼津市役所総務部政策企画課	焼津市では、高度成長期の急激な人口増を背景に公共施設の整備を進めてきたが、老朽化が進んでいる。効果的に公共施設をマネジメントしていく取組が求められている。	地域の人口推移の検証や施設の利用状況を詳細に分析し、老朽化を迎えている集会施設の複合化案について提案頂き、市民への説明、話し合いを経て、建設計画を実現可能レベルに調整
12	浮橋地域のスローフードを考える会 (伊豆の国市)	中山間地の活性化	①大学生の視点から、中山間地を幅広い世代にアピールするための意見がほしい。 ②ワークショップを取り入れながら、地元の自然を最大限に利用し、農業・観光へと循環させるプランを検討してほしい。
13	株式会社アイ・クリエイティブ/ジョブトレーニング事業 (静岡市)	①ニート(若年無業者)増加問題。 ②静岡県耕作放棄地増加問題。	①大学に望むこと…ニート・ひきこもりや発達障害などの教育心理の知恵を貸してほしい。 ②ジョブトレーニングが提供するもの…ゼミ等の一環として参加してもらうことで、実現場場+学びの場を提供する。
14	松崎町	町内にはなまこ壁を配した歴史的建造物が残されている。所有者の高齢化、維持のコスト高等で取り壊すことが多い。町の財産ではあるが個人の所有物である歴史的建造物を、いかに後世に残していくべきか悩んでいる。	最小の費用で最大の効果のある維持や修繕方法を一緒に考え、古民家を利用したまちづくり手法と収益事業のアドバイスや、学生による町おこしや収益事業の模索など。
15	松崎町	町民の森「牛原山」を利活用したいが、中途半端に行政主導で整備してきたため町民の利用が少ない。眺望はよく晴れていれば展望台からは富士山も望める素晴らしい山だが、利用されない。	人が集まる仕掛けや、町民が自ら維持や修繕に携われる方法を一緒に考え、里山の素晴らしさを内外に発信し、愛され利用される森にしたい。アドバイスや学生の知力、体力、気力を町おこしに活かしたい。
16	松崎町	松崎町では、ソフト、ハード両面からの防災施策が急務である。津波対策として水門の建設や防潮堤の嵩上げなど必要な事業だが、景観などの問題で全体の理解が得られない。	防災機能だけの無機質な防潮堤や水門を、どうしたら景観に配慮したデザインや機能を持たせることができるか、一緒に考えてほしい。
17	松崎町	過疎化・少子高齢化により、当町もご多分に漏れず耕作放棄地が急増してきている。このままでは町内の農地が荒地だらけになり、今年度加盟を認められた「日本で最も美しい村」連合に恥ずかしい姿をさらしかねない。	耕作放棄地の解消だけでなく、永続的に利活用し続けることができる仕掛けづくりを期待する。当町での有効な作物の選別や耕作方法の指導、学生による農業体験事業化などでの協力がほしい。
18	松崎町商工会	松崎町の中心市街地である商店街が、過疎化・少子高齢化によりどんどん寂れている。このままではゴーストタウン化してしまう。現在でも転居し、空き地になるところが後を絶たない。空き店舗も多く、シャッター商店街になりつつある。	商店街の魅力発掘と、買い物弱者である高齢者への商店街への買い物支援法。商店街のアート誘致、コミュニティ公園化について助言がほしい。全体的なデザインについても関わってほしい。
19	浜松都市環境フォーラム (浜松市)	浜松市はマイカーに依存した都市となっている。深刻な渋滞問題が予測され、抜本的な交通対策が急務である。工業都市として発展してきた浜松が、今後も持続的に発展していくには観光・文化都市としてのまちづくりが必要になる。	持続可能な都市づくりは、行政・民間が扱いにくい空白分野で、大学の持つ知的・人的資源を活用して研究する価値が高く、実現を前提に「特区」の認定を受けられるような研究を期待したい。

20	伊豆半島ジオパーク推進協議会	伊豆半島ジオパークの進捗を判断する評価指標や調査方法の不足。貴重な資源の保全、教育、防災、地域振興等、様々な分野での取組があるが、活動の検証とフィードバックが難しい。	伊豆半島ジオパークの活動の進捗状況を把握し、フィードバックするのにどのような調査や指標が適当なのか、大学の知的、人的資源を活かしたモデル調査の実施、各種資料の収集と分析等。
21	三保の松原フューチャーセンター（静岡市）	①三保の松原の保全。 ②三保の魅力を知り、次世代へ伝えていく仕組みづくり。 ③三保住民の安全な生活環境の確保。三保で活動している団体は数多く存在するが、横の連携が取れておらず、協働できるきっかけがほしい。	①耕作放棄地を活用し、三保自生の松から植樹用の松を育て、商品化するための支援。 ②子供や住民が気軽に参加できるイベントを開催し、地域の関わりを強化するための支援。
22	焼津市市民活動交流センター運営協議会	焼津市内には市民団体が数多くあるが、団体相互の交流が少なく、協働もできていない。焼津市の抱える様々な問題に行政、企業、市民が協働して解決策を模索するようになれば、もっと良いまちになると思われる。	市民活動の実態を知り、その活動を直接・間接に支援できる人材育成を依頼したい。センターへの支援として、情報発信能力の強化、交流会の企画立案、市民が参加しやすい方法論の検討などがある。
23	静岡市葵生涯学習センター	①「生涯学習」の学習格差の解消 ②「生涯学習」に興味・関心がない地域住民に「生涯学習」に取り組んでいただけるよう支援していく	①地域の現状調査の一連の事業の中で、調査方法や課題解消への取組方法、評価方法へのアドバイスがほしい。 ②大学生等の若年層の認知を高める手法を開発、事業実施をする。
24	伊豆を愛する会（南伊豆町）	ジオサイト候補地の里山を所有しているが、安全面の不安を理由に、南伊豆町観光協会と行政は消極的である。これまで500名以上の方が問題なく見学しており、地域の不安を取り除くために力を貸してほしい。	①岩石構造専門家の派遣をお願いしたい。 ②石切り場には、昔の人が文字を掘った跡が何か所かあり、解明されていないことも多く、歴史文化の専門家の派遣をお願いしたい。
25	静岡県／松崎町	①棚田保全・活用－石部地区の棚田を保全するとともに活用を検討。 ②特産品を活用して加工品づくりと販路拡大までを検討。 ③伝統芸能保存。 ④大学と地域のネットワーク化。	①既存のつながりでは生み出されていない部分の開拓に期待。 ②新しい視点で工夫を加えた加工品を開発してほしい。 ③継続的課題解決活動に取り組み、地元との連携を築いてほしい。
26	静岡県／東伊豆町	①エコタウンとしての売り出しに向けたガイドシステムの研究。 ②地域づくりインターンとしての学生の参加。 ③オリーブの里づくりへの大学の参画。	①エコ資源の活用方法の提案。 ②従来より長期的な関わりが可能な大学生の派遣と、長期的な関わりを求める。 ③オリーブの栽培の可能性について、植樹の段階からの研究を希望。
27	静岡県／南伊豆町	①竹の子振興方策の検討－産地化に取り組んでいるが、竹林の利活用についての研究が必要。 ②過疎地域における公共交通サービスの在り方の検討が課題。	①従来と異なる新たな竹の子の活用策の提案に期待。 ②集落が分散し、主要道路周辺のみを運行するのではカバーしきれない公共交通網維持の問題の検討に期待。

《第2期》

No	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
1	東伊豆町観光協会（東伊豆町）	東伊豆のジオスポット・細野高原の「すすき祭り」は、町民による活動が実を結び集客が伸び始めた現在、さらなる活動の展開が課題となる。町内へ観光客を誘導するための食品開発・土産物の展開などを通して、細野高原・東伊豆町の価値を高めていきたい。	学生たちには細野高原イベント委員会へ参画という形での支援を期待する。参画することによって、実行委員会や地域住民と交流を図るとともに、地域の実態を学生たちの目線で捉え、問題提起・解決方法の提案・提案の実行を実行委員会や当団体とともに作り上げていきたい。
2	静岡市葵生涯学習センター指定管理者（公財）静岡市文化振興財団	静岡市生涯学習センターは地域住民が豊かな人生を送るための場として活用されているが、学生・勤労者層は利用率が低い。すべての地域住民の生涯学習活動を充実し、地域と密着した活動とするため、事業の企画立案・運営に地域住民自身、特に若年層が参画することが重要である。	①市民協働・若者参画による生涯学習の活性化のため継続的な意識調査において、企画・実施・分析作業を支援してほしい。 ②若年層に対して、施設や生涯学習の認知を高めるための手法を開発・事業実施をしているが、そのプロセスに参画してほしい。 ③実習生制度への学生参加を推進してほしい。
3	富士のさとの森づくり実行委員会（御殿場市）	国立中央青少年交流の家には様々な樹木が存在するが、一定の考え方をもちて植栽するべきであるとの意見が寄せられている。すでにランドデザインが一応存在しているが、これをひとつのたたき台にしてコンセプトを固めていくことが必要である。	①学生の意見を反映した森づくりのランドデザインの再構築作業 ②ランドデザイン再構築に必要な森林の伐採等の作業 ③既存の草花の生育等に配慮した環境の専門家の指導、助言（整備時期、整備内容の決定）

4	松崎町	旧依田邸は築300年以上の歴史をもつ建造物で、伊豆半島の発展の原点であり、歴史的・文化的な価値が高いが、修繕・保存という課題に直面している。また町の地域資源として活用し、まちおこしの拠点とする方策を立案・実行することも課題である。	最少の費用で最大の効果のある維持や修繕方法を一緒に考え、歴史ある建造物を利用したまちづくり手法を提案してほしい。教職員・学生を送り出してフィールドワークとして支援していただきたい。
5	松崎町	当町では近隣に大学がなく、せっかく素晴らしい公開講座などがあっても、移動時間を考えると参加をあきらめるしかない。また、大学生との交流に時間とコストがかかるため、いつ何時でも交流が持てる状態にない。	今夏(2016年7月)オープンした、シェアオフィス「ふれあいとふや。」において、静大の公開講座を受講できるように配信を検討していただきたい。大学生との交流にも使っていただきたい。
6	松崎町	松崎町が抱える課題として、人口集中地域から遠いこと、交通手段が整っていないことがあげられる。そうしたハンディキャップを克服して交流を進める方法としてのICTの活用が考えられる。光ファイバー網の整備をしたが、利活用の具体的な方法が見つからずにいる。	防災や観光、福祉をICT技術で地方の不利、不便さを解消できる技術や提案の提供。
7	松崎町	全国で活発に行われているふるさと納税だが、当町では返礼品競争ではないふるさと納税本来の趣旨を踏まえた活性化を検討しているが、思ったように納税額が伸びない。	外部から見た松崎町の魅力を探り、そのうえでどのような返礼品やどうしたら納税満足度があがるかを一緒に研究してほしい。
8	松崎町	町内に大学の施設や研究室などがいないため、産官学の連携した取り組みができない。また、仕事が少ないため若い人が出ていく。	新しい働き方や隙間産業などを学生と一緒に考案していただきたい。 例:耕作放棄地や放棄果樹園を集約し、都市部の週末農業体験のニーズへ繋げるなど。
9	茶夢来(菊川市)	環境整備や農業を核とした新たなライフスタイルを実現する地域づくりが必要となっており、食と農の拠点創造、食育の場づくりを目指している。地域住民の意識調査やニーズ調査をベースに、地域住民が一体となった取り組みを行っていききたい。	農業を核とした食育、地域食材を活用した商品開発、レシピ開発、ノルディックウォーキングを活用した地域健康づくりと観光開発など地域が一体となったまちづくりを目指したい。菊川ブランドのストーリー性の創造に大学の支援をいただきたい。
10	NPO法人 富士川っ子の会 (富士市)	地域全体に「かわっこカフェ」の存在を周知し、自由に集える居場所であることを認知させる手立てを見出すことが課題である。参加者には「かわっこカフェ」の存在意義が理解されつつあるが、地域住民に「一度は行ってみようと思わせる仕組みの工夫」が必要である。	遊び塾と「かわっこカフェ」の活動を通して、次の点を明確にしたアドバイス。 ①地域に求められている居場所とはどんなものか ②それはどのように形作られるべきか ③地域での連携で欠かせないものは何か
11	NPO法人 富士川っ子の会 (富士市)	富士市の高齢化率は全国平均程度だが、要介護者数が多く深刻な問題となっている。解決法として、高齢者が後期高齢者の介護を担当するようにして、循環型の介護要員を確保するという構想のもとで活動を進めている。	課題に対応する団体設立の可能性と実現のために必要なことのアドバイスをいただきたい。 ①介護者と要介護者の区分方法 ②適正報酬額の算出 ③団体の設立及びあるべき介護支援形態
12	自立快活プログラム実施 自立援助ルーム 訪問レストランf (浜松市北区)	障害に対する理解と認知が低すぎ、まだ障害者であることをカミングアウトできない社会性が問題である。自立して一人暮らしする障害者も増えてきたが、結果的に介助者の手を借りるため、介助者本位のサービスを受けている。本来的な意味での自立援助が必要である。	①事業自体が本格始動していないので、まずグレーゾーンにどれくらいの障害者が存在しているのか示してほしい。 ②障害者のための恋愛対策に共に踏み込んでほしい。 ③理解促進を深めるための方策を検討してほしい。
13	認定NPO法人 クリエイティブサポートレッツ (浜松市西区)	障害福祉サービス事業所「アルス・ノヴァ」では、毎日30名以上の障害を抱えた方々が通ってきている。「多様で寛容な社会」の実現のため、できるだけ多くの人にこの場を体感してもらいたいが、一般の方々に足を運んでもらうことが難しい。	①学生たち自身が障害福祉施設を体験・体感してほしい。 ②その体験をもとに、どうしたら自分の知り合いが障害福祉施設に関心をもつのか考え、実際に身近な人を誘ってきてもらいたい。 ③広く一般の人に関心をもってもらうための方法を共に考え実行していきたい。
15	南伊豆町	伊豆半島最南端に位置し、人口減少と地方経済の縮減が続き、その克服が基本的課題である。一方、豊かな自然環境をはじめとした地域資源も有し、大都市圏との連携を取りながら健康創造のまちづくりを進めているが、大学と連携することによってそうした取り組みを加速できる。	宿泊型のフィールドワークや長期休暇を利用したインターンシップ等を企画し、南伊豆ならではの地域資源を活かしたまちづくりに関わってほしい。

16	藤枝市役所	年間150万人の来園者がある蓮華時池公園や日本遺産の旧東海道及びその構成文化財である神社仏閣等を有しているが、周辺商店街への回遊性がほとんどないのが現状である。歴史と文化を核とした地域ブランド力の強化と観光交流の促進、商店街活性化による地域経済力の向上、更には生活環境の改善など総合的な再生を図る。	市が実施するハード事業（公共空間の高質化や景観向上、市有地の整備等）と連動し、「回遊性向上による商店街の活性化」をキーワードに地域ブランディングを図るため、学生の継続的な参画と関わりをお願いしたい。
----	-------	---	---

地域課題をきっかけに、それぞれの地域に入り、住民の方と交流し、課題解決を一緒に考えることを通して、学生たちは大きく成長しています。

これまでに取り組んできた各課題の進捗状況は、こちらからご確認ください。

http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies_history_list.php

公開シンポジウム

地域課題をめぐる取り組みの持続可能性を考える

日時：2023年12月27日（水）12:55～16:00

開催方法：Zoomによるオンライン形式

コーディネーター：阿部耕也（静岡大学地域創造教育センター長）

プログラム：

(1) 地域連携・課題解決支援の事例報告

報告1「松崎町の持続可能なまちづくり」

報告者：深澤準弥（松崎町長） ほか

報告2「伊豆半島における地域づくりの課題と可能性～南伊豆町伊浜地区の取組事例～」

報告者：山口一実（南伊豆町地方創生室 室長）

松本恒明（南伊豆町伊浜区長）

田村ロータス翔音（南伊豆町地域おこし協力隊）

報告3「伊豆稲取における地域の持続モデルづくり～人口減少地域の課題と可能性～」

報告者：荒武優希（合同会社so-an 代表社員）

報告4「みんなのチャレンジ基地ICLa（イクラ）の挑戦

～「やってみよう！」があふれる静岡（2023年度方針）～」

報告者：宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター教授）

報告5「株式会社こども会議(仮)の挑戦～こども達の「できる！」を社会の中に～」

報告者：安池中也（株式会社こども会議(仮)）

株式会社こども会議(仮) 六合東事業所社員

報告6「しずおかキッズカフェ」

報告者：小林タバサ（しずおかキッズカフェ代表）

(2) パネル・ディスカッション

パネリスト：報告者、課題提案者

阿部（コーディネーター）——定刻となりましたので、ただ今から地域課題解決支援プロジェクト 公開シンポジウム「地域課題をめぐる取り組みの持続可能性を考える」を開催させていただきます。お忙しいところご参加いただき、ありがとうございます。

さて、このシンポは集中講義の「地域連携論」と組み合わせ、受講者である学生だけでなく、一般の参加者にも開放した公開シンポジウムとなります。この形式のシンポは、地域創造教育センターの前身が設置されて以来継続開催しており、25年ほどの歴史があります。地域課題解決支援プロジェクトを立ち上げた10年前からは、地域課題・社会課題の解決支援に関わる様々な取り組みを、地域で実施している方々に直接紹介いただき、情報交換・交流を行うきっかけとなるよう進めています。

また、この地域課題解決支援プロジェクト公開シンポのもう一つの特徴は、松崎町、南伊豆町、東伊豆町など課題提案のあった自治体・団体の方に、継続的にパネリストとなっていただいていることです。みんなのチャレンジ基地・ICLa、株式会社こども会議、しずおかキッズカフェのご報告も含め、その点ではこのシンポは定点観測的な報告会ともなっています。この1年の

進捗や成果も含め、ご報告を楽しみにしています。

では第1報告「松崎町における課題と可能性」を松崎町の深澤町長からいただきます。

報告 1

松崎町の持続可能なまちづくり

深澤準弥（松崎町長）

1. 松崎町の概況

松崎町は、人口が11月末で5840人、2874世帯、高齢化率が50%に届きました。伊豆半島の西南海岸に位置しています（図1）。電車が通っておらず、主な公共交通機関はバスとタクシーです。訪問者のほとんどが自家用車かレンタカーで来ます。

北海道の帯広市、長野県の旧安曇村（現・松本市）と姉妹都市を結んでいて、昨年（2022年）には「神話がつなぐ姉妹都市」として富士宮市と、県内では初めての姉妹都市提携を結びました。富士山と当市の浅間神社が神話でつながっていることが始まりですが、防災協定や産業・観光の交流を通じて静岡県を盛り上げようと考えています。

松崎町の人口は、最も多かった昭和35年には1万2183人でしたが、どんどん人口減少が進んで、半分以下になっています。

江戸時代の終わりに「三余塾」という私塾がありました。松崎の名家に生まれた土屋三余さんが、江戸で学んだ後に開いたものですが、農家の方でもしっかり学ぶことによって社会を変えられると教えました。「三余塾」は静大東部サテライトの名称にも使われています。地方で学びを得て、近代日本を構築するいろいろな方が輩出したと言われています。「学び」がキーワードであり、今でいう大学等の高等教育につながります。

松崎町の関係者の三余塾生はいろいろな方がいますが、有名なところでは当時の国鉄（現JR）総裁になった石田礼助さんがいます。この方のおかげで、予定になかった三島に新幹線の駅がつけられて、伊豆西海岸の基盤整備に貢献しています。その他、漆喰芸術で美術館もある入江長八や、北海道の帯広を開拓した依田勉二も塾生の一人です。

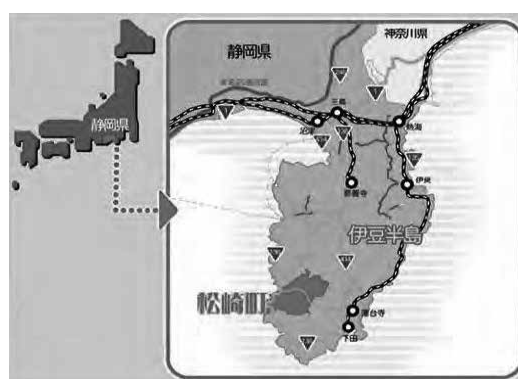


図1 松崎町の位置

2. 松崎町の課題と対策

松崎町には、伊豆南部や日本全国の地方で不便なところに共通の課題があります。人口流出による過疎化、産業の担い手不足があり、マーケットとしても厳しい状況で企業が参入しにくいということもあります。人がいなくなれば、知恵やものも含めて総体的にいろいろなものがなくなってきます。

65歳以上が50%以上になると限界集落と言われますが、こういう場所が日本全国あちこちに出てきているのが現状です。松崎町は、増田リポートの地方消滅可能性都市にも入っていますが、人がいなくなってゴーストタウンになるということです。国は地方創生の政策をいろいろな形で進めています、あまりにもスピードが速いため対応しきれない状況です。

一番厳しいのは地域コミュニティの衰退で、今までできていたものができなくなり、人と人とのつながりが希薄化し、商売にならないので公共交通が維持できなくなり、社会の流れとともに農業が生業として成り立たなければ農地はどんどん荒れていきます。人口が減れば当然、空き家や空き地が増えます。このような大きな課題があります。

その対策として、一つは、今の人口で健康な人を増やすことにより、コミュニティの維持や担い手の確保をもう少し伸ばそうとしています。また、子育て支援も行います。結婚しない人が増えていると言われますが、強制するのではなく、価値観をしっかりと見つけていただいて、出会いから出産、育児までつながるような支援を模索しています。元々観光地として担ってきた産業の振興や交流観光客数の増加には、今までどおりしっかり取り組みます。移住・定住の促進は、U、I、Jターンで多くの方に移り住んでもらうのが理想ですが、分母が減っている中で、日本全国で取り合うのは非常にハードルが高くなってきます。ただ、デジタル化が進み、起業・創業支援によって新しい働き方が創出されてきています。そして、静岡県は東南海トラフに対する防災力の強化が喫緊の課題なので、その対策にもしっかり取り組みます。

松崎町は平成25年に「日本で最も美しい村」連合に加盟しましたので、日本全国59町村・地区とのネットワークを最大限に生かすような政策を見つけていきます。この連合は、地域にあるものを売るという共通の目標を持っていますが、景観まちづくり条例を設置して進めていきたいと思っています。「世界の最も美しい村連合」には、フランス・イタリア・スペインなどからも加盟していますが、「日本の最も美しい村連合」のホームページで、ヨーロッパの取り組みが見られますので、ご覧になってください。

3. 松崎町の将来

松崎町は第6次総合計画を立てています。私はこのシンポジウムに誘われたときには松崎町の職員でした。今は町長という立場になりましたので、広く町民にも同じ方向を向いてもらおうということで、町の設計書といわれる総合計画を策定することにしました。

内容は後で説明しますが、計画書の表紙には、生まれてから死ぬまでのイラストを描いています(図2)。死ぬことをしっかり表現している自治体は、なかなかないと思っています。みんな死ぬのだということをはっきりうたって、しっかり生きていくことにつなげていきたいと考え、今回の総合計画を作っています。



図2 第6次松崎町総合計画表紙

松崎町は「ここでは、誇り高く、穏やかに、豊かに生きられる」ことを目指して、「コンパッションタウン松崎」を志向しています。今はいろいろな形でデジタル化が進み、コロナで分断されたりしました。元々資本主義はお金だけではないのですが、お金に重点が置かれる世の中になりました。それは違うのではないかと疑問を投げ掛けて、まちづくりを進めたい。自分の中で大切なもの、目に見えないものを自覚することで豊かに生きられる。必ず死ぬのだからしっかり生きる、ということを表に出したいと考えています。

具体的な内容は町のホームページに掲載しています。総合計画の概要版を見ていただければ、私がどんなことを考えてまちづくりを進めているかが見えてくると思います。町長に就任してからの思いや考え方は、毎月、ホームページの町長コラムに綴っています。「町長の部屋」を見ていただければありがたく思います。

松崎町のこれからの可能性として、大学との連携があります。大学にはまちづくりに非常にお力添えいただいていますし、松崎町を含む賀茂地域には高等教育機関がないので、そういう意味でも助かっています。大学生世代の人たちが、フィールドとしてこの地域に入っているいろいろなことをしてくれるのは、本当に刺激になりますし、大切なことだと思います。

また、県内外の他の自治体との連携や協力ががあります。今日も東伊豆町・南伊豆町の方が来ていますが、職員時代からの仲間として、この地域の盛り上げができていますと本当に感謝しています。その他、今は官民連携もキーワードになってきているので、金融機関や企業との連携も継続してしっかり進めています。

社会の変化するスピードが速いので、自治体の変化がついていけないところもありますが、最後は人としてつながっていくことが将来の地域の発展につながると信じて、いろいろな形の連携・協力を求めているところです。先日も東伊豆町で公共交通の勉強をさせていただき、東伊豆町の合同会社so-anでもいろいろな勉強をさせていただきました。

4. 新たな挑戦

松崎町もいろいろなことにチャレンジしています。デジタル村民、NFTやDAOなどを活用し、物理的な距離を超えてネットワークや新たな関係人口を作っていきたいと思っています。静大とは、連携事業の2030松崎プロジェクトを進めています。合同会社松崎プロジェクトとのテレワーク推進事業は、コロナでテレワークが進んだことをきっかけに、関係人口的に、仕事をしながら遊ぶといったときには、遊ぶ先を伊豆の南部にということで、可能性が広げられると思っています。地方からしっかり風を起こしていかないと、次につながっていかないと考えています。

これからは、人口減少社会を嘆くのではなく、リデザインに取り組むことが非常に重要です。自治体としては住民登録数に振り回されず、持続可能な地域を創造していくことが自分たちに与えられた大きな課題です。今までは観光交流客数に注力してきましたが、これからは地域を協働で活性化する人口、松崎ファンである関係人口を増やすことが大きな課題であり、目標だと考えています。

短い時間でばたばたと説明しましたが、一番小さな町の大きなチャレンジにご期待いただきたいと思います。人のつながりから、企業のつながり、自治体のつながりが創造されていきます。基本は人間だということをまざまざと感じていますので、お話しする機会をいただけて本当にありがたいと思います。引き続きこれからも松崎町、伊豆半島、静岡県が頑張っていけるよう尽力してまいりますので、よろしく願います。今日は、本当にありがとうございました。

(阿部)

深澤さん、ありがとうございました。パネリストの名簿を見て、松崎町の町長だから深澤さんと呼んだと思われるかもしれませんが、それは逆で、ずっと協力いただいている方がたまたま町長になったということです。

報告 2

伊豆半島における地域づくりの課題と可能性

～南伊豆町伊浜地区の取組事例～

山口一実（南伊豆町地方創生室室長）

松本恒明（南伊豆町伊浜区長）

田村ロータス翔音（南伊豆町地域おこし協力隊）

1. 南伊豆町の現状

毎年このような機会をいただき、ありがとうございます。これまでは全般的なお話をしていましたが、今回は取組事例に絞ってお話します。伊浜地区の取組についてご説明します。

伊豆半島全体の人口の流れは、流出が多く、流入は少なくなっています。コロナで東京方面からの流れが若干変わっていますが、大きな変化はなく流出が続いています。南伊豆町は先ほどの松崎町の南、伊豆半島の最南端にありますが、南伊豆町でも中心部に人が集まってきています。特に海岸部から南伊豆町の中心部へ動いています。そして、下田市やその先の南伊豆町の外に出ていく傾向があります（図1）。コロナで外からの流入も若干出てきていますが、基本的にはこのような流れです。



図1 賀茂地域の人口の流れ

人口が減っていることは間違いありませんが、国立社会保障・人口問題研究所（社人研）の推計値でも、コロナの影響もあって減少幅が低くなっていて、2015年時点での推計値よりも2020年の最新版の人口推計値が高くなっています。社人研の推計値もこれだけ変動するので、深澤町長のお話のとおり、人口の多寡だけ見て一喜一憂するのではなく、地域の基盤づくりをしっかり進めていきたいと思っています。また、加茂地区全体では流入・流出の方が多いため、出生・死亡だけを見た閉鎖人口は、実際の推計値より高い数字になっています。地区別に見ると、南伊豆町だけが通常の人口推計より閉鎖人口の推計値が少なくなっています。転入超過、あるいは転入・転出が均衡していて、出生数が少ないか死亡数が多いかのどちらかで人口の自然減が高くなっているということです。

2. 南伊豆町の方針

南伊豆町では、地域住民が望んでいるのは人口増加ではなく、今の暮らしを継続することだと考えて事業を進めています。要因である人口減少を克服することで、解決可能な課題もありますが、それ以外にも解決しなければならない課題があり、あるいはそこを解決しなくても解決できることがあるのではないかとということで検討を進めています。

全国的に人口減少が進む中、南伊豆町だけ人口増加に転じる可能性は極めて低いので、人口減少の抑制ではなく、人口が減少した中でも住民が望んでいる今の暮らしを継続していくためにどうすべきかを考えていく必要があります。

静岡市や三島市など一定規模を有する地域で、人口1000人のコミュニティに10人の移住者が来た場合と比べて、人口50人のコミュニティに5人の移住者が来れば影響力がかなり大きくなり、

人口は増えますが、住民が望んでいる今の暮らしが保てるかどうかが怪しくなってきます。

方策の一つは、人口減少の抑制に加えて、地域経済を含めて、将来にわたって活力ある地域社会の実現を目指していくことで、これは国の総合戦略にも出ています。もう一つは、関係人口の強化です。地域の中にいなくても、一緒に地域を支えてくれる人材を獲得することが、これからの地域づくりでは重要だと考えています。

3. 伊浜「300年の邑づくり」プロジェクト

伊浜地区では今年度から、伊浜「300年の邑づくり」プロジェクトを始めています。静岡県の支援を受けながら地域づくりをする事業です。画家の谷文晁が約200年前に伊浜を訪れ、伊浜を描いています。それから200年たって、港ができたり、家ができたりしていますが、基本的には大きな変化がありません。200年前から変わらない伊浜を、これからの100年も変わらずに守っていこうということで、「300年の邑づくり」としています（図2）。



図2 谷文晁筆「公余探勝図巻」（東京国立博物館所蔵）に描かれた伊浜（左）と200年後の伊浜（右、松本恒明氏提供）
東京国立博物館ウェブサイト：<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0095904>

伊浜地区は南伊豆町の最西端にあり、町の中心部からも遠く、国道からも距離があります。人口減少・少子高齢化が著しく、若干古いデータですが、昭和40年代には約500人いた人口が現在は約300人になり、高齢化率が57%、20歳未満の人口は16人です。人口減少に伴い、産業の衰退、耕作放棄地・空き家等の増加が見られます。

これまで、人口減少抑制と健康づくりの取り組みを、平成29年度から南伊豆町主導の事業によって進めてきましたが、そこから派生した幾つかの事業が現在でも動いており、「300年の邑づくり」プロジェクトにつながっています。

これまでの取り組みでは、住民の声として、伊浜地区の祭りを守っていききたいとか、地域の営みを続けていきたいということはありませんでしたが、伊浜地区で盛んなマーガレット栽培は、これだけで生活していくのが難しく、若者が伊浜地区では生活できないという意見が聞かれました。また、いつまでも元気で活躍するために、できること・したいことを何かやってみたいという声はあっても、何をやっていくかが決定されていませんでした。

そして、話し合いの中で、伊浜地区産業活性化の取り組みとして、レモン栽培にチャレンジすることになりました。これは、今回一緒に参加している地域おこし協力隊の翔音君が中心となって行っています。伊浜にあった段々畑は荒廃地となっていましたが、これを活用してレモンづくりで地域活性化を目指しています。

また、伊浜地区が譲り受けた元庄屋さんの家をみんなでリノベーションし、コミュニティの拠点にするプロジェクトも動いています。ご存じの方もいると思いますが、数年前から行っているトコリンピックは、ところてんを使ってみんなで楽しむイベントです。静岡大学の地域創

造学環にも、フィールドワークとして地域内の美化活動や地域の良いもの発見の活動などをしていただいています。

伊浜300年の邑づくりプロジェクトは、実行委員会を立ち上げていて、地域おこし協力隊や自治会の関わりの中で、民間企業等も含んだ形で事業を進めています。この事業の短期的な目標は、これまで個別の取り組みだった活動をつなぎ合わせ、一体的に実施し、今は活用されていない潜在的な地域資源を最大限活用し、交流人口や関係人口を拡大していくことです。事業の効果としては、地域資源の活用や環境保全に対する住民意識の醸成、地域活動等への参画意識の向上があり、最終的にはコミュニティ形成を目指しています。これはものを作るのではなく、人を育てる事業として実施しています。

4. 具体的な事例

令和5年度に実施してきた内容の幾つかを、事例として紹介いたします。

企業連携プログラムでは、サントリーと一緒に事業を進めたり、今年もトコリンピックを行ったりしました。また、「レモンでも植えよう会」では、翔音君が中心となってレモン栽培に取り組んでいます（図3）。今年4年ぶりに伊浜地区祭典が行われました。コロナでお祭りができない地域もありますが、伊浜地区では楽しく開催することができました。



図3 産業活性化の取組例：レモン栽培

最近では、防災という切り口でワーケーションの活動をしている団体がフィールドワークで伊浜を訪れました。南伊豆町全域でも行っていますが、伊浜でも行き、防災機能の強化に協力していただきました。

伊浜地区で事業を進めていくには、人材不足になることもあるので、その点は南伊豆町が中心となって、町の人事部を使って人材育成や人材マッチング等の活動をしています。一緒に来ている松本区長と翔音君からも一言ずつ話してもらいます。

(松本)

伊浜区長の松本です。山口室長の説明に補足することはあまりありませんが、人口を増やそうとするのではなく、減っても減ったなりの生活で生きていくと考えたときに、室長が縷々述べたことの中で、デジタル化が頭の中から離れません。例えば、町から来る「広報南伊豆」等を、光ケーブルを使ってテレビの中に入れ込めないかなどと考えています。

また、深澤町長の話にもありましたが、今までできていたものができなくなるけれども、それは必要なものかということも絶えず頭の中にあります。そんなことも考えながら、行きつ戻りつしながらやっています。

それから絶えず気にしていることは、私たちにとっては当たり前だけれども、他地区から来た人にとっては非常に貴重なものがあるということです。静大と一緒にフィールドワークをしている中で、「地元学」と表現されていたのが、まさに端的な表現だと認識しながら、日々活動しているつもりです。これからもいろいろな情報を得ながら、人口が減っても住み続けられる村を、頑張って実現していきたいと思っています。

(田村)

南伊豆町地域おこし協力隊の田村と申します。関係人口や人材育成で、伊浜という300人の集落に一人が入ったことによる影響力や、より移住者が増えたときのコミュニティづくりに関連して活動しています。協力隊の活動期間はあと2年ほどありますが、その先を見据えて、前向きにいろいろな方々とのつながりを増やししながら、地方創生に携わっていただければと思っています。よろしくお願いします。

(阿部)

ありがとうございました。4年前のトコリンピックでは私も銅メダルのメダリストだったのですが、復活した大会で100m競争に当たるものに出場したところ1回戦で惨敗し、非常に残念です。来年はメダリストの誇りを賭けてリベンジしたいと思っています。

報告 3

伊豆稲取における地域の持続モデルづくり

～人口減少地域の課題と可能性～

荒武優希(合同会社so-an代表社員)

1. 観光産業の見直し

伊豆半島の東側の東伊豆町での活動をご報告します。東伊豆町の稲取という漁港のエリアを中心に、空き家の利活用をする活動を、学生時代からかれこれ10年ぐらい続けています。私はよそ者ですが、住む人、来る人に充実した伊豆ライフを送ってもらいたいというのがモットーです。私は自分が好きになった伊豆半島で暮らしていますが、旅行などで訪れる周りの方々にも同じように豊かな体験をしてもらいたいということから、宿泊施設の運営を中心に事業を行っています。もう随分前になりますが、東伊豆町で、田村さんと同じような形で、地域おこし協力隊の活動をしていたのですが、今は独立し、起業して会社を運営しています。

人口などの概況は割愛しますが、東伊豆町は今後20年で人口が現在の1万1000人余りから5000人減ると予測されていて、住民はじめ地域のいろいろな方々が危機感を持っています。今の生活を続けられればいいのですが、人口が20年で半分になるという、これまで経験したことがない人口減少のスピードにどう対処するのか、まちづくり活動を展開する人たちの会議では毎日のように議論されています。

今の稲取地区の主産業は観光産業ですが、私は観光産業によって発展してきたエリアではなく、観光産業が見てこなかった、地元の特徴が色濃く残るエリアに注目しています(図1)。そこを生かすことで、観光産業がさらに発展するような接続ができないかということを考えながら仕事をしています。



図1 東伊豆町内の観光開発エリアと未開発エリア

そういう考えに至ったのは、伊豆半島はどこも風光明媚で、景色が良いポイントがたくさんありますが、東伊豆町の稲取も例に漏れず、海と山がすごく近い良い景色があるからです。伊豆半島から半島状に突き出している地形のおかげで、陸地から見ても船の上から見るような景色が広がっています。海と山が近いので農産物も海産物も取れますが、ローカルフードも魅力の一つだと思っています。

私は大学院を卒業して、そのまま地域おこし協力隊に入りましたが、学生時代に建築を勉強していたこともあって、人が暮らしを積み重ねていった中で出来上がってくる景色にすごく関心があります。

地元の人々の暮らしが集積したエリアでは、車の入っていけないような路地が迷路のように張り巡らされていて、路地を構成する軒先や家の前に、その家に暮らしている人たちの個性があふれ出ています。それは田舎らしい風景かもしれませんが、私は横浜生まれ、横浜育ちで、人の温もりがあふれる町で暮らしたことがなかったので、こういう景色が今の伊豆の観光と接続することで、新しい価値になっていくのではないかと思いながら宿泊事業をしています。

2. 空き家の利活用事業

特に問題意識を持っているのが町並みの喪失です。人が減ることで空き家が増え、その空き家も放置していれば倒壊の危機にさらされて、取り壊しという選択肢が出てきますが、取り壊してしまうと再建築が難しい場所も町の中には多々あります。形あるものはいずれなくなるとはいえ、できるだけ町を大切に使用していきたいと、空き家の利活用をする事業を展開しています。

漁師町ですが、漁師さんがどんどん少なくなっています。高齢で漁師は引退だからと、大切な船を手放してしまう方もいます。漁港エリアのど真ん中に家を買って暮らしていますが、人が減ることで、この町らしさ、町のアイデンティティが失われつつあることを日々実感しています。空き家の利活用で、そういう悪い流れを少しでも食い止められないかと思っています。

われわれが目指しているのは、古き良き港町の家屋を地域資産として捉え直し、地域産業と結び付けることです。そのあるべき姿を考え、アクションしたいと思っています。

現在、稲取エリアで五つの空き物件を改修した施設を運営しています(図2)。宿泊施設が3件とシェアキッチンとシェアオフィスです。この拠点をさまざまな形で組み合わせながら、まちづくりにどう使っていけるかを考えています。宿屋をやっているのだと自己紹介していますが、本当にやっていることは宿屋の外側のことです。



図2 空き家を改修した拠点の運営(5軒)

3. 合同会社 so-an のその他の事業展開

いろいろな事業を営んでいますが、基本的には、来る人たちにいかにこの土地を好きになってもらうかを工夫しながら、滞在のお手伝いをしています。ジオガイド、ネイチャーガイドができるスタッフもいるので、町を紹介するアテンドをしたり、美術作家や大学生の滞在を受け入れたり、最近では高校生の滞在の受け入れもしています。番外編では、町の成人式のオンライン配信も行いました。

合同会社 so-an のメインの事業は宿泊施設ですが、施設名は「湊庵」と書きます。造語ですが、港町の日常を旅する体験を提供する宿です。稲取半島はシンボリックで、一つの場所として捉えやすいので、このエリア一帯を一つの宿に見立てたサービスが展開できないかと考えています。基本的にはリノベーションして再生した宿泊施設を一つの部屋と捉え、その部屋に滞在しつつ、街中の飲食店や温泉旅館など町全体を楽しんでもらうサービスを提供しています。

キンメダイが取れるということで、漁師さんたちは誇りを持って漁をされていますが、キンメダイのお寿司が食べられるお店を案内したり、町で一番大きい温泉旅館と提携して、そちらに案内したり、ニーズによって地域のいろいろな人たちを紹介したりしています。ちょっとした町の紹介屋さんです。一次産業の担い手の漁師さんや農家さんのところに案内したり、これからの季節に盛り上がってくる「吊るし雛」の縫子さんたちを紹介したり、雛の製作体験に案内したりしています。

2階建ての民家を改修した一棟貸しの宿泊施設も運営しています。また、カフェ付きの宿泊施設は、妻が店長として子どもを育てながら、地域の人たちにかわいがってもらいながらやっています。山の方では、アウトドア体験ができるコテージも運営しています。

学生時代に昔の消防団の詰所を改修した施設は、シェアキッチンという形で地域の人たちが出入りするコミュニティキッチンになっています。

オーシャンビューのシェアオフィスもあります(図3)。最近が増えてきましたが、外部の人たちが関わる機会がない土地だったので、私が大学生のときもそうでしたが、外部から来ても活動拠点にできる場所がありませんでした。そこで町の拠点を一つ改修して、外部の人が町のことにに関わり、町のことを考えられる根城になる拠点として造りました。造ったのはコロナ前でしたが、コロナによって一波あり、いろいろな人にテレワーク施設として使ってもらえる拠点になりました。仕事以外にも、地元の若い人、旅に来た人、テレワーカーなど、いろいろな人が夜な夜な集う場所に生まれ変わりました。



図3 海の見えるシェアオフィス「EAST DOCK」

施設の特徴、地域の特徴、運営を担っている人間の特性をうまく組み合わせて、いろいろな人たちの滞在ニーズに応じていった先に、この土地ひいては伊豆半島・静岡のファンを増やしていけたらと考えて、このような事業を展開しています。

海・山の良いロケーションがそろっていて、若い人たちが続々と移住したり、常連さんになったりしたので、野ざらしの場所に若者たちが自由奔放に飛び出していく光景を、日常的に目の当たりにしています。

4. これからの取り組み

最近の動きとして、学生時代に空き家改修を一緒にやった同級生たちと、もう一つ会社を立ち上げました。建築設計や不動産運営に携わる会社です。やっていることは学生時代の空き家改修の取り組みと変わりませんが、2024年2月にリニューアルオープンする伊豆稲取駅改札前の空間をデザインし、運営もしていくプロジェクトに取り組んでいます。



図4 新会社での取り組み(地域のエリアブランディング事業)

街中の空き物件を購入し、移住してきたご夫婦に賃貸で貸し出して、地域の空き物件の利活用をさらに加速させ、地域のエリアブランディングをする事業も営んでいます(図4)。

2016年から大々的に活動していますが、徐々に空き物件が活用され、2024年4月には15施設が稲取の中に生まれます。徐々に地域が賑わってきている実感がありますが、これからもこの活動を加速させていきたいと考えています。

(阿部)

ありがとうございました。報告者の方々が、継続して参加いただいているうちに、次々と立場や仕事の幅・関わりが広がってきていますが、荒武さんもすごく変わりました。特に家族で住むようになり、強力な集客力と交流を生み出すとんでもない実力を持った1歳半のお子さんがいて、私もよく定点観測に行っています。

報告 4

みんなのチャレンジ基地 ICLa の挑戦 ～「やってみよう！」があふれる静岡（2023年度方針）～

宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター教授）

1. 静大フューチャーセンターからICLaへ

みんなのチャレンジ基地ICLaの挑戦について報告しますが、後半では、今抱えている課題を皆さんと共有したいと思っています。今年度の方針を『「やってみよう！」があふれる静岡』として学生たちが取り組んでいます。

みんなのチャレンジ基地ICLaは、昨年（2022年）10月ごろに静岡大学の1.5kmぐらい先で賃貸物件を借り、学生の秘密基地として学生の活動拠点となるものを開設しました。静岡鉄道さんやアイザワ証券さんなどの力も借りながらやっています。30坪強の賃貸物件にいろいろな備品を運び入れ、富士山や静岡大学が見えたりするところで、学生たちが集まったり、昼寝をしたりしています。

想定していたのは、「大学生のうちに何かやってみたい」「就職活動の前に何かやっておきたい」「これまでの生活を変えたい」などと考えている学生でした。社会や未来に対して不安を感じながらも、自分自身の世界を広げたいという学生が伸び伸びやっつけいける場を、大学あるいは地域の力で作りたかったのです。コロナ禍で関係が作りにくく、学生の友だち同士が集まりにくいなどがあったので、そういう場を作ろうということでスタートしました。

その起点になったのは、10年前に当時の学生と作った、静大フューチャーセンターという、組織というより集まりです。私の小さい研究室を会場として、テーマを決めて地域の方や学生が集まり、お茶とお菓子を食べながら、いろいろな対話を重ねていくような場を作りました。その場は大人が進行するのではなく学生が進行しました。進行だけではなく、2～3時間のプログラムをどのように進めるか、どんな人に来てもらうかも学生が決める。ディレクターとファシリテーターを学生が運営するところが特徴でした。

当時、私も民間から大学の教員になったところでしたが、非常に能力が高い一方で、社会への不安や大人との接点の少なさを学生から感じていましたので、それを何とか解決したいと思い、このような場を作りました。もっと自信を持って社会に出てほしい、学生が持っている本来の力を大人の人にもぜひ見てほしいという思いがありました。

地域課題がこの授業やシンポジウムのテーマですが、まさしく静大フューチャーセンターは、阿部先生のおかげで地域課題とつながりました。思えば約9年前に、松崎町に呼んでいただいた際に、住民の方との話し合いで学生がファシリテーターをすることで、最初は腕を組んでいた大人同士が本音をいろいろ語り出す場面を見て、学生の力はすごいと思っていました。2016年は、菊川市でお茶のイベントを企画している大人たちを、学生たちがファシリテーターをしながら後押しする場を作りました。2017年には南伊豆町に行って対話の場を作りました。

人口減少で、担い手不足などの課題が非常に複雑化するといったコミュニティの問題がありました。一時ですがここに学生が入って、さまざまな人をつなげることによって、内外のサポーターを作る起点ができたり、意外な視点に気付いたり、あるいは住民の方がやる気・覚悟を持ってくれたりという場ができました。そこでファシリテーターをしていた学生たちは、既に30代手前の人たちも多くなり、会社や地域で中心になってやっています。

フューチャーセンターは元々、地域課題を解決するために始めたわけではありませんが、学生の力が結果として地域課題に大いに役立つと実感しました。コロナでフューチャーセンターの活動が休止したので、場を作るためにチャレンジ基地ICLaがスタートしました。

2. 2023年度の取り組み事例

今年度（2023年度）は、学生スタッフが約10名でいろいろ取り組んでくれました。

まず、インスタグラムを使った情報発信とコミュニケーションです（図1）。スタッフ紹介では、スタッフの顔やプロフィールなどを出して、どういう人がやっているのかを見せる演出をしています。また、「今日は開いています」とリアルタイムで発信したり、3月にはこれから大学に入る新入生にライブで発信したりしました。

ホームページも学生たちが作り、発信しています。チャレンジ基地ICLaがどういうところなのか、どんな活動をしているのか、どんな人に会えるのかも学生たちが自分の言葉で発信しています。

Discordを使ったオンライン・コミュニケーションのサイトも作っています。リアルな場もとても大切ですが、物理的な場を作ってから非常に感じたのは、それと並行してバーチャルなプラットフォームを作ることによって、毎日みんながその場に行くわけではないので、ここでつながっていただけます。その運営も学生がやっています。学生だけでなく、受講者である社会人の方にも自由に投稿いただいています。

このような活動をして約1年が過ぎました。当初からやっているオーダーメイド学習塾「あむラボ」も継続していますし、静岡大学の学生がパーソナルトレーナーの資格を取って、ここを会場にしてさまざまな有料のレッスンを始めたり、非公認サークルの活動拠点を作ったりしました（図2）。「さかば〜いくら」には、この人と話をしたいという人を学生たちが連れてきます。居酒屋のメニューのように「〇〇の話0円」などと書いてあり、学生が注文するとその話が始まります。お酒も入りますが、学生が主体となって社会人を呼んできます。最近よく投稿を見る「自炊同好会」では、学生たちがここを拠点にタコパなどでワイワイやっているようです。

ここからスピナウトした活動もあります。竹問題について語りたところから始まって、関係する大人たちも集まりました。静岡大学のキャンパス内には竹がたくさん生えているので、それで流しそうめんもやりました（図3）。

3. 新たな課題：学生の傾向と強み

このようにフューチャーセンターの流れから、学生の主体的な活動として少しずつ進んでい



図1 Instagramを使った情報発信



図2 学生の活動例：学生パーソナルトレーナーによるレッスン



図3 「みんなで竹伐採から始める流しそうめん」2023年9月

ると報告したいところですが、最近少し課題を感じています。

ICLaという名前は静岡大学の学生は割とキャッチしているようですが、最近、学生のこんな言葉が遠回しに聞こえてきました。「ICLaは自分みたいな学生が行くところじゃない。もっとすごい学生が行くところなので、とても行けない」と。ICLaに限らず、学内で就職のイベントをやっても以前のように学生が集まらなくなりました。「一生懸命な姿を他の学生に見られたくないから、イベントには参加しない」という声もありました。

これは稀なことではなく、ボリュームゾーンの学生の発言です。ある種の壁のようなものを感じているようです。われわれ大人が、壁など感じなくていいと言うのは簡単ですが、本人にとっての壁がどこから来ているのかに興味もあって、最近考えを整理しているところです。

この課題の根幹にある若者の傾向として、縦の関係である立場の違う方や年齢の違う方とのコミュニケーションの方が、横の関係に比べてストレスが少なく、若者は横の関係に敏感に生きていきます。小学校からずっと友だちにどう見られるかを強く意識して暮らしている若者が多いと感じています。そして、グループ内で期待されているキャラを逸脱するような行動をすると、グループの目が変わってきて自分の居場所がなくなるようです。友だち同士の強い関係の中で生きていて、それは私たちから見ると非常に狭いところなのです。大人はコンビニの前で座っている若者を見ると、もっと他人の目を気にしたらどうかと言いますが、彼らにとっての他人の目は、公共の世界ではなく、目の前で一緒に座っている友だちの目なのです。

ICLaは元々「大学生のうちに何かやってみたい」という学生を想定していましたが、ここにギャップがあると感じています。

地域にさまざまな学生が入り、本当に生き生きやっていることも多い一方で、そういうところとの接点を持たない、あるいは持とうとしない学生が昔より増えているような気がします。地域課題と学生との折り合い、地域においても学生の力が必要だと言っても、そこに共通のパイプラインや道路がないと行き来ができません。

最近大事だと思っているのは共感です。共感するものに対しては非常にアクティブに取り組んでくれます。興味ではないのです。興味の前に共感がないと進みません。もう一つは役割だと思っていたのですが、昨日学生と話をしていた腑に落ちたのは、単に役割ではなく、使命感に近い役割があると、とても前向きになれるということです。使命感といっても強いものではなく、「お前がいるからこれが成り立つ」「自分がこれをやるのがみんなのためになる」ということがあると、非常に前向きになります。地域と学生の間でここにきちんと折り合いがつくと、ストレスなくうまく行けるでしょう。大学に近いところでは大学の友だちの目が気になりますが、地域に出れば友だちの目は割と気にならないので、そういう意味で地域課題と学生との関係性を改めて考えた方がいいと思います。

地域で学生が役に立っていくようにと授業等でいろいろな試みをし、失敗もたくさんしてきました。その経験から、地域で生かせる学生の強みを四つに整理しました。

まず、学生間のネットワークです。例えば、大学生の意見を聞こうとしたり、グループで何かやろうとしたりしたときには、学生はこのネットワークを使って友だちを誘います。地域から見ても価値が高いものだと思います。

次に、利害関係のなさです。9年前に松崎町でやったときに発見したのですが、当時は「かすがい機能」と言っていました。利害関係のある大人同士では本音が言えなくても、利害関係のない学生が入ると本音が語られます。大学関係者や役場の人間が行くより、学生が話を聞いた方が本音を語ってもらえます。

三つ目は、視点や視座の違いです。これによって、地域で当たり前だと思われていたものに

新しい価値が見えることもあります。

そして何より4点目、SNSの利用が本当に強いことです。学生が皆、インスタグラムやティックトックなどをバランスよくやっているわけではなく、何を使うかはそれぞれですが、総じてSNSを利用しています。それも強みになります。

今はこのような課題を感じています。

(阿部)

ありがとうございました。静大フューチャーセンターは、地域課題解決支援プロジェクトが始まって、いろいろな課題が出てきた最初に関わっていただきました。しかもそれが松崎町などに非常に好評で、その後うまく運ぶようになった恩人です。

報告5

株式会社こども会議（仮）の挑戦 ～子ども達の「できる！」を社会の中に～

安池中也（株式会社こども会議（仮））

株式会社こども会議（仮） 六合東事業所社員

(安池)

今日は私と、六合東事業所の小学校6年生の社員が来ているので、その両面からお話ししていきたいと思います。

1. 株式会社こども会議（仮）とは

株式会社こども会議（仮）は、2020年5月に異業種の大人たちが、子どもたちの「できる！」を信じて立ち上げたプロジェクトです。当時はコロナ真ただ中で、子どもたちは学校にも幼稚園にも行けず、友だちにも合うことができず、多くの子どもたちがストレスを感じていました。

その中で、何かにチャレンジしなくてはいけないのだが、何もできない自分たちは駄目な子ではないのか、と思っている子どもたちが多いという声を聞き、そんなことはない、こんな時代だからこそみんなの力が必要だ、という思いを子どもたちに届けたくて、このプロジェクトをスタートしました。

当時、大人たちは皆リモートワークで、自宅で仕事をしていましたので、子どもたちにとっては普段見ることができない大人たちの働いている姿、格好いい姿が目の前にあり、きっとそれに憧れているはずだと思いました。そして、今子どもたちが言われている言葉を逆にしたら面白いのではないかと思ったのです。子どもたちの方から「パパ、今日は僕お仕事だから遊んであげられないけどいいね」「ママ、今から会議だから静かにしてね」、そんな言葉が家の中で繰り返される世界を作ったらどうかと思いました。会社という世界に、社員として子どもたちが参加・入社してきて、社会課題や商品開発などを子どもたちが議論しながら、社会に参画していくことをイメージしました。

3歳から15歳までの子どもたちが、会社という世界の中でお仕事として活動します。会議なので、当然いろいろな社員の話を聞き、自分で考え、発言し、行動しながら、周りで応援・サポートしてくれる大人を巻き込みながら、そのアイデアや意見を具現化していきます。簡単に言うと会社ごっこ・会議ごっこではありますが、子どもたちは真剣に実社会に働きかけながら、夢を実現していく場になっています。

3年たって現在は125名プラス65名の社員がいます。この65名は一つの事業所です。応援してくれている株主が110名プラス法人も5社あります。125名の子どもたちは、世界11カ国から入社・参加してくれています。いろいろな事業部を持つ組織図がありますが、今日は本社と事業所の五つの挑戦について発表します。

2. 事例1：オンラインで挑戦

最初にチャレンジしたのは、オンラインでの挑戦です。2020年のスタート時から、オンラインの中に会社という世界を持ち、いろいろなことに取り組んできました。商品開発をしたり、

いろいろな企業とプロジェクトを組んだり、国会議員を招いて投票率についてみんなで議論したりと、本当にいろいろなことをしてきました(表1)。

中でも印象に残ったのが、ロビー活動で社会問題を解決するロビー事業部が2022年4月に扱った「すべり台問題」です。小学校4年生の女の子がいて、4歳の妹がいつも公園のすべり台で頭をぶつけてしまうのだけれども、どうしてそういうことが起きるのかをロビー事業部のみんなで考えました。大好きな公園で泣いたりせずに、みんなが楽しく遊べるためにはどうしたらいいのかを、子どもたちは一生懸命考えます。私たちは何も言わないのですが、いわゆるフィールドワークで、自分の近くの公園に遊びに行って「うちの近くの公園でも頭をぶつけていた」「うちはぶつけていなかった。多分、あそこの棒が赤いからじゃないか」などと、いろいろなことを会議の中で話すのです。

最終的に、みんなのアイデアをすべり台のあった行政に提言書として持っていこうという話になり、子どもたちは一生懸命考えました。子どもたちはお金のかかることを考えそうだと思うかもしれませんが、「お金がないことは分かっている」と言うのです。どうしたらお金をかけずに頭をぶつけない工夫ができるか、下にクイズを出してみたらどうか、子どもたちの言葉で注意を促すアナウンスを公園に流したらどうかなど、いろいろなアイデアが出てきました。それを提言書として2022年4月に、子どもたちの手から行政に渡すことができました。妹を思う一つの気持ちから出たアイデアが、大人たちを動かすことにもつながった、オンラインでのチャレンジでした。

3. 事例2：市政と挑戦

二つ目に、市政に挑戦しました。チャレンジしたのは、岡山県真庭郡新庄村という日本で2番目に小さな村の小学校3年生から中学1年生までの9名の社員たちで、約半年間かけて教育についての会議をしました。

村の課題を子どもたちが探してくるのですが、子どもたちは村のことをよく見ており、大人の話もよく聞いていることが分かりました。しかし、先ほど宇賀田先生がおっしゃっていたように「キャラ化」といった感じで、子どもたちが既に用意された答えを持っているような気がしてなりませんでした。

そこで子どもたちに、教育という視点を少し変えて、自分たちはどうありたいのか、どんな大人になりたいのか、この村でどんな経験をして自分はどんな人でありたいのかを考えてもらい、自分と向き合ってもらいように思考を変え、最終的には自分がどんな人間でありたいのか、何を大切にしているのか、そんなことを村の大人たちに発表してもらい会議をやりました。それが今年(2023年)2月の話です。

表1 株式会社こども会議(仮)の主な活動実績(2022年7月時点)

2021年05月	・御前崎事業所「母の日企画会議」(エステサロンから依頼) ・創立記念パーティー、株主総会開催
2021年06月	・商品説明会議 ・会社説明会 ・海外出張研修スタート
2021年07月	・御前崎事業所 社員募集会議 ・「ほっこりキッチン」商品開発会議 ・ワクワク開発事業部「バジマ会議」 ・ロビー事業部(国会議員さんと投票率について会議)
2021年08月	・めいなどはなのすみっこ部屋スタート(社員により持ち込み企画) ・オンライン社員旅行
2021年09月	・LINEアカウント等 運営改善 ・しぞー会「株式会社こども会議(仮)」活動ビッチ
2021年10月	・みらい設計会議(東神開発さんからの依頼)→二子玉川事業所へ発展
2021年11月	・ひんじゅつの秋スペシャル 絵と音楽についての会議
2021年12月	・ともひろとしおりのりんごカフェ(社員による持ち込み会議) ・静岡大学地域創造学環シンポジウムに登壇
2022年01月	・スケジュール製作事業スタート(新しいカレンダーの開発) ・目標設定会議 ・お金の会議スタート(月1回開催) ・ずーさんのおもしろかふぇ(未就学社員の企画運営)
2022年02月	・オマーンから初入社(2名) ・スリランカの方から「ひなまつり」について知りたいというお仕事依頼 ・大学生が国際事業部にインターンとして参加 ・福利厚生(中学生社員さんが休校・休園の社員さんのためマジックショー)
2022年03月	・国際事業部「オノマトペ」の説明事業スタート ・ロビー事業部(市議さんと会議) ・構想日本メルマガにて紹介
2022年04月	・海外支局スリランカとの会議 ・ロビー事業部「すべり台問題」提言書作成会議 ・お仕事体験会+会社説明会
2022年05月	・おとな相談室・社員相談室
2022年07月	・ワーキングスペース(夏休み期間中) ・ななみのアイスおしゃべりタイム(社員の企画運営) ・スリランカ小学校へ文房具をおくるプロジェクトスタート

4. 事例3：企業と挑戦

現在進行形で企業との挑戦もしています。東京の二子玉川にある、東神開発という玉川高島屋を運営している会社です。二子玉川に通える30名の子どもたちが月に1回、お借りした高島屋の役員会議室で議論しています。二子玉川は消費の町で、煌びやかで大きな町ですが、その消費の町を子どもたちが自分たちの町にして、長く環境にも配慮した素敵な町にしていこうという思いがあって、特に二子玉川事業所では子どもたちが環境に配慮した活動をしています。

10月には、アップサイクルで不要なものを楽器に変えて演奏会を行い、アップサイクルの楽しさや環境の大切さを語る企画を、玉川高島屋さんの1階の広いホールで行いました。多くのお客さまが足を止めて、子どもたちの歌声やメッセージを聞いてくれました。このような活動が、企業とのチャレンジです。

5. 事例4：学校と挑戦

今日は、実際に学校と挑戦の活動をしている六合東事業所の社員たちから発表してもらいますが、その前に組織図だけ説明します（図2）。

六合東事業所は、社会課題課、広報部兼海外支局、六合東小課の三つの課に分かれています。その他にもSBSラジオの仕事、SDGsの仕事、広報、カンボジアに夢を届ける仕事

などを行っています。今日は広報課の社員たちが、六合東事業所で実際にどんな仕事をしているのか発表します。よろしくお願いします。

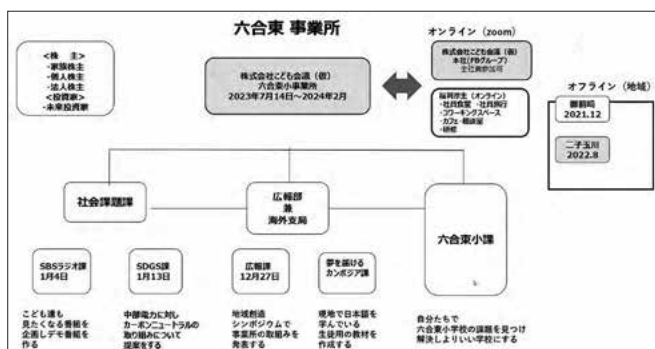


図2 六合東事業所組織図

(児童A) こんにちは。六合東事業所の代表で来た六東広報課、音楽と編集が好きなAです。

(児童B) リズムゲームが好きな、Bです。

(児童C) 本が大好きな、Cです。

(児童D) Jリーグ好きの、Dです。

(児童E) 絵を描くのが好きな、Eです。

(児童F) ゲームや音楽が好きな、Fです。

(児童G) マンガが大好きな、Gです。

(B) 今から六合東事業所の活動を紹介します。

六合東事業所は、五つの課に分かれて活動をしています。各課はそれぞれ、六合東小学校や社会、さらに海外をより良くする活動を行っています。そして、この事業所を支える理念を柱として日々活動しています。

柱となる理念は「全力・自分らしく相手と社員の笑顔と幸せをつくろう」です。この理念は、幾つかの意見をもとに私たち社員が話し合っ、一つの理念にまとめました。多数決で決めるのはもったいない、全部に思いが詰まっているので、合体して今の理念になりました。

私たちの提案理由は「子どもでもしっかり働ける!」「子どもだって仕事はできる!」です。

(C) それでは、今紹介した理念を中心に活動している課を紹介します。

まずSBSラジオ課は、SBSラジオの「IPPO (#いっぽ)」という番組に「若者などが見たくなる番組を作ってほしい」という依頼を受けて活動しています。「お年玉の使い道」という企画は1月4日放送なのでぜひ聞いてください。「このラジオはみんなが楽しめるのか」「どの世代の人でも楽しめるのか」など、他の年齢のことも考えることを大切にしたいという思いで活動しています。

(D) 次に環境保全課は、CO₂を出さないためにどうしたらいいか考えています。現在「節電すごろく」を中部電力の人と一緒に作ろうと計画しています。「人生ゲーム」を作っているのは、子どもたちが楽しく学べるようにするためだそうです。

環境保全課の人にどんな思いで活動しているか聞くと、「少しでも社会を変えたい」と答えてくれました。最終目的は、楽しみながら節電に取り組むすごろくを作って、できれば商品化することで、1月13日にツインメッセ静岡で行われる「SDGsコレクションin静岡」でプレゼンするそうです。

(E) 夢と想いを届けるカンボジア課です。カンボジアの人に日本の学校のことを知ってほしいと思い、日本語を勉強している学生たちのための教材動画を自分たちで作っています。

11月30日にカンボジアと六合東事業所をつないで行われたオンラインミーティングを密着取材しました。教材動画を紹介したり、質問されたり、自分たちが質問したりと、とても充実したミーティングでした。来年(2024年)の2月には新入生が来て、そこでカンボジア課が作った教材が実際に使われます。

(F) 次に六東改善課は、学校の掃除や注意喚起のポスターを作成するなど、六合東小学校がより良くなるための活動をしています。東っ子の意見を集めるためのポストも設置しました。

「ちくちく言葉」と「ふわふわ言葉」についてのポスターが、校内の階段や廊下に貼られています。絵も描いてあって、とても分かりやすくなっています。行っている理由は、事業所の人などからリクエストをもらったからだそうです。六東生のことをとても考えてくれています。思いは「明るく、やっている自分たちも楽しく活動をやっていきたい」だそうです。

(G) 最後にわれわれ六東広報課は、六合東事業所のPRや仕事募集の広告を作っています。六東広報課を通じて、皆さんに六合東事業所を知ってもらいたいと思っています。課の仕事に密着取材したり、スライドを使って動画や言葉をまとめたりする活動をしています。

(A) 各課の活動の様子を動画で見てもらいます。

—ビデオ上映—

これはCO₂を出さないためにどうすればいいかを話し合っているところです。

(C) これは教材動画に載せる音楽を選んだり、思い出をカンボジアの言葉に翻訳しているところです。アプリを活用して、分かりやすい教材を作っています。

(B) これは六東のみんなからリクエストを集めるためのポストを作っている様子です。今、このポストは靴箱近くに置かれています。

(E) これはプレゼン用の台本を作っているところです。どうしたら分かりやすく課のことが伝わるかなどを話し合っています。

(A) 動画は以上です。六合東事業所のことを理解してもらえたでしょうか。このように五つの課は、悩み、話し合いながら思いや目的に向かって活動しています。これからも六合東事業所をよろしくお願ひします。これで六合東事業所の発表を終わります。

6. 事例5：未来へ挑戦

(安池)

六合東事業所はこのような形で活動しています。ここまで四つのチャレンジを紹介しました。五つ目のチャレンジは「子ども会議のチャレンジは続きます」ということです。

私たちが最終的に目指しているのは、株式会社こども会議（仮）を、子どもたち自身が経営する本物の会社「株式会社こども会議」にすることです。子どもたちは本当にいろいろな力を秘めており、可能性の塊です。子どもたちが自分たちの「できる」という気持ちを信じて、地域の中で力を発揮して活躍する、そういう場づくりをしています。最終的には子どもたちが自分の力に自信を持って、社会の中で活躍してもらいたいと思っています。（仮）の文字が取れて、子どもたちが経営する会社が日本中に誕生し、それがオンラインでつながって、子どもたちが社会を変えていく。そんなことができたらと思っています。

(阿部)

ありがとうございました。社員さんが発表すると聞いて、「パネリストとして最年少の方々が発表してくれます」と紹介しようと思いましたが、年齢に関係なく素晴らしい取り組みと素晴らしい発表でした。

報告 6

しずおかキッズカフェ

小林タバサ（しずおかキッズカフェ代表）

1. 「しずおかキッズカフェ」の成り立ち

私は静岡市出身で、静岡大学人文社会科学部を2021年4月に卒業しました。今は東大の大学院で院生生活を送りながら、子ども食堂の活動のたびに静岡まで高速バスに乗って帰省する生活を送っています。

子ども食堂「しずおかキッズカフェ」は、2016年3月に私の地元である静岡市葵区の瀬名地域に立ち上げました。8年目になりましたが、月2回、土曜日のお昼に子どもは無料、大人は300円でランチを提供しています。ビュッフェ形式の食べ放題で、子どもが自分でお皿を選び、好きなように盛り付けるという形を取っています（図1）。

毎回若い親子連れで賑わっていて、気が向いたときに立ち寄れる場所として活用いただいています。1回に10品以上の豊富な品数を取り揃えています。乳幼児には、切り刻んだり潰したりした離乳食も用意しています。お代わりも自由です。



図1 キッズカフェの様子

一番よくされるのは、なぜ子ども食堂を立ち上げたのかという質問です。いつもこの話をするのですが、私自身が中学時代に不登校を経験したことが、ものすごく大きなきっかけでした。勉強は好きだったのですが、学校の対人関係に悩んでいて、外には出ず行き場もなくて、家に引きこもる生活をずっと送っていました。その頃から、家でも学校でもない、いわゆる第三の居場所が地域にあればと感じていました。元々料理が大好きで、子どもも好きだったので、子ども食堂を立ち上げようと思っていたときに、子ども食堂のムーブメントが全国的にメディアで取り上げられていたので、自分にも何かできることはないかと思い、立ち上げることを決意しました。

まず、地元の小学校2校に孤食に関するアンケートを実施してみたところ、土曜日の昼食を抜いている子どもや、一人で食べている児童がすごく多いことが分かりました。土曜日は親が仕事に行っていて、給食もないので、食べなかったり、あり合わせのスナック菓子だけを食べている児童も目立っていました。当時は静大の1年生で、学業との両立もしやすいので、土曜日のお昼に開催する子ども食堂を立ち上げました。

最初は、閉店した喫茶店や絵本屋の空き店舗を時間単位で借りていたのですが、子ども食堂は食べ物を提供する場なので、食器や食材を開催日ごとに会場に運搬することがすごく大変でした。雨の日はびしょ濡れになったり、食材を寄付していただいても置く場所を確保できなかったりして、必要なものを常時置いておく拠点が重要なことを痛感し、2017年の夏休みからは、瀬名川のすずらん通り商店街の空き店舗を賃借して展開しています。

2. 現在の活動状況

利用者層は、立ち上げ当初は小学生ぐらいを想定していたのですが、実際には赤ちゃんから中高生と多様で、毎回50～100人、多いときは150人ぐらいの方が来ます。特にコロナ禍になってから子どもの比率が増えていて、親が仕事に行っている間、子どもたちが兄弟や友だちを連れて来るケースがかなり多いです。

瀬名地域が葵区と清水区の区境にあるので、清水区や駿河区からも来ています。ボランティアの方々も、いろいろなメディアの報道を通して子ども食堂のことを知り、市内のみならず焼津市や富士市からも来てくれます。

食を通じて地域で子育てをサポートする場所なので、子どもは何人来ようが、何人兄弟であろうが全員無料で、保護者は300円です。家庭の経済状況に関わらず、同じ子どもとして交流することができる場所、保護者も同じ子育てをする親として、地域の人々と交流できる場所として活用してもらっています。

食事をするだけではなく、子どもも親も楽しめて、地域の人々も巻き込んだ形の各種イベントの開催も大切にしています。これまでに、柿畑で柿狩りイベントをしたり、コロナ禍の時期は見送らざるを得ませんでした。夏には流しそうめん大会も開催しました。

2018年からは、独自の防災訓練を実施しています(図2)。静岡市千代田消防署のご協力の下、消防車や起震車の展示、煙体験ハウスなどを使って防災について学びました。子ども食堂にはたくさんの食器や備蓄食品、調理器具がそろっているので、災害時には絶対に役立てられると考えているからです。地域の人との関わりを通して、日頃から防災意識を高める場所として続けており、次回の開催は来年(2024年)1月13日を予定しています。



図2 防災訓練の様子

3. 8年間の活動を振り返って

活動も8年目に入りましたが、地域の方々のご協力なしには続けられませんでした。資金は寄付金や自分のバイト代で賄っていて、食材の多くはフードバンクふじのくじから提供していただいています。他にも企業や農家、個人の支援者の方々から、たくさんの支援をいただいています。驚くほど地域の方々が支えてくださると、毎回実感しています(図3)。

私個人がすごいことをしていると褒められることが多いのですが、実のところ私がしたことは、前々からこういう支援をしたいと思っていた地域の方々の善意を、可視化したに過ぎないのではないかと以前から思っています。

振り返ってみると、地域の利用者の方々との信頼関係を何よりも大切にしてきました。「子ども食堂には大変な貧困家庭の子どもが来るのでしょうか?」とよく聞かれます。もちろんいますが、家庭の経済状況、家族関係、子どものプライベート、センシティブなことを最初から根掘り葉掘り聞いたり、外部に情報を漏洩したりは絶対にしません。私自身も中学の頃に孤立したり、人を信じられない経験をしたからこそ、利用者の方々の人権とプライバシーの尊重はすごく大切に



図3 調理をするボランティアスタッフ

ています。

最近、子どもの貧困やヤングケアラーの問題などがメディアで取り上げられるようになって、キッズカフェを見学・視察したいという問い合わせがよくありますが、お断りしています。せっかく居心地の良い居場所を作っているのに、スーツを着た行政の人などが腕組みをして、食べている人たちの姿を監視していたらすごく食べづらいし、もう二度と来たくないと思うってしまう利用者も出てくるかもしれないからです。

キッズカフェに興味があるという方には、見学ではなくボランティアとして洗い物や調理を手伝ってもらいながら、どんな様子なのかを感じ取ってもらうというスタイルを取っています。

ボランティア・社会貢献活動・慈善活動をここまで続けていると、メディアに取り上げていただく機会も多いのですが、だからと言って決して自分のやっていることがすごいとか、偉いことをして施してあげているという態度に絶対にならないよう、初心を忘れず謙虚な気持ちを持ち続けることも、とても大切にしています。

今は物価もすごく高騰していて、誰もが生活の苦しいときです。キッズカフェに来て1食分の食費が浮き、家事の負担が少しでも減って助かるのは、経済的に困窮している家庭に限らず誰もが同じです。これまで利用者の人権・プライバシーを人間として尊重するスタンスで活動を続けてきましたし、今後もこのような気持ちを大切にやっていきます。私のような学生が立ち上げた、本当に小規模なボランティア団体ですが、地域の皆さまのご理解とお力添えで、ここまで活動を拡大・継続することができたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。

4. 「夢がふくらむドリームキッズ博覧会」の開催

最後に、2週間前に開催したイベントを駆け足でご紹介します(図4)。子どもたちと触れ合う中で、子どもたちにもっと夢を持ってほしいと強く思うようになり、いろいろな職業に触れて、将来の夢につながるように、いろいろなところにお声掛けして、JALや劇団SPACをはじめ、いろいろな企業・大学・団体からご協力いただきました。

常葉大学の保育学科には、子どもたちと絵本やカルタを通して交流してもらい、静岡大学の地域創造学環には、瀬名エリアの衛星写真を使ったお宝マップ作りをしてもらいました。地元の瀬名北郵便局では、缶バッジを作りながら郵便局の仕事を紹介してくれました。竜爪園という介護施設では、職員が高齢者疑似体験を子どもと一緒にやってくれました。静岡銀行では、小遣い帳作りとお金についての講座を開いてくれました。この施設には調理室もあるので、たくさんの調理ボランティアスタッフが手伝って、カレー・大学芋・お汁粉などを作りました。JALがとても好評で、パイロットとCAの方が折り紙飛行機教室を開いてくれました。献血車も来て、もちろん献血できない年齢の子どもが多いのですが、パパが献血している姿を子どもが見て、献血について知ってもらいました。展示室では戦国武将の甲冑の講座を開きました。このように充実した大規模のイベントを初めて開くことができたのは、本当に地域の皆さまのご協力があったからこそでした。

しずおかキッズカフェに関心がありましたら、ホームページを覗いてみてください。これまで7年以上の活動の様子が全部載っています。問い合わせ欄もあるので、ボランティアに関心がある方は、ぜひお問い合わせください。次回の開催は1月13日です。消防士が来る防災のイ



図4 イベントチラシ

メントを予定しているので、ぜひ遊びに来てください。

(阿部)

ありがとうございました。最後に紹介して下さった「夢がふくらむドリームキッズ博覧会」は、企画・運営・実施のすべてを小林さんがされていて、普段以上に忙しかったと思います。そこでエネルギーを使われたのに、また公開シンポジウムに参加しろなどと言って申し訳ありませんでした。

パネルディスカッション

阿部——引き続きパネルディスカッションを行います。報告の時間を非常に短くしていただいたので、まず報告者から自身の報告の補足や他のパネリストへの感想や質問をしていただき、その後、フロアからの質問に答えていただくことにします。松崎町の深澤町長は別の会議に出席のため退出されましたので、ここからは一緒に活動をされている松崎町教育委員会の斎藤一憲さんに加わっていただきます。

斎藤——企画観光課に9年いて、去年と一昨年はこのシンポジウムで発表もいたしました。4月から教育委員会に異動になり、生涯学習・社会教育に関わっていますが、特に子どもとの関わりが大きくなっています。皆さんのお話の中で、子ども会議や静岡キッズカフェなど、子どもとのコミュニケーションに関して非常に勉強になりましたし、今までとは少し違った視点で見えております。

阿部——それでは南伊豆町の皆さんからお願いします。

山口——まずは今回の登壇者の中にもお世話になっている方がいますので、この場を借りてお礼を申し上げます。荒武さんには、今年（2023年）入った地域おこし協力隊員の研修を引き受けていただきました。いろいろご指導いただき、無事に1カ月の研修期間を経て戻ってまいりました。ありがとうございました。大変厳しい指導だったと聞いています。

安池さんには、うちでも事業所を立ち上げたいとお話ししてから、なかなか進んでいません。思いは変わっていませんので、今後ともご協力いただければありがたいです。

安池——こちらこそ。

山口——阿部先生と宇賀田先生に大学の立場から伺いたいことがあります。われわれ行政は今、令和6年度事業に向けて予算編成作業を行っています。大学との連携を含めた事業を行う中で、だんだん自治体の資金力がなくなり、人的資源が不足してきています。大学生との連携事業やフィールドワーク、大学自体との連携事業は、長い目で見て人材育成や人との関係構築に取り組んでいきたいのですが、自治体では短期的な成果を求められます。連携事業では短期的な成果が出にくく、一方で長期的な成果を求める事業は予算化されにくいので、非常に厳しいと感じています。

実際に学校側・先生方として、自治体あるいは事業者との連携に際して、目標設定とする期間や目標の共有をどのように捉えているのでしょうか。また、何かいい事例があれば教えてください。

阿部——その点は、宇賀田先生の順番のところでお答えいただけるとと思います。

松本——今日の話进行くと、6人の方に共通して、場所・拠点・居場所がキーワードになっていると思います。南伊豆町が伊浜地区で旧大家邸の古民家を、拠点・立ち寄り所・コワーキングスペースに使っているのは、方向的には間違っていないと感じました。荒武さんに一つ質問です。荒武さんのお話を2年続けて聞いて、人を中心にした都市計画というイメージを非常に強く持つ

ているのですが、稲取地区では空き物件の流動化といったことは容易にできるのでしょうか。

荒武——お褒めにあずかり、とてもありがたいです。南伊豆でご挨拶させてもらって以来です。空き家の流動化ですが、学生時代を含めると10年ぐらい稲取地区に絞って空き家の活用をやってきたおかげで、行政の支援を受けながらですが、「空き家のことで困ったら荒武」みたいな謎のブランディングがされて、役場に空き家のことで問い合わせが入ると、私のところに連絡が来てコンタクトを取ったりするようになっていきます。可視化はできていませんが、空き家を抱えて困っている方からの相談が少しずつ増えています。

また、物件と人のマッチングになるので、よそから来て宿泊をしてくれたお客さんが、この土地を好きになって移り住むような循環が生まれています。人の獲得と言ったら失礼かもしれませんが、このまちで何かをしたい人の蓄積と、物件をどうにかしたい地元の大家さんたちの蓄積がそれぞれあります。2週間前も物件が売れましたが、不動産営業ではなく、ボランティアという趣味でやっています。この土地に住んでいない大家さんから鍵を預かって内見希望者を案内したり、賃貸ですが改修可能ですといった説明をしたりしています。まだ数は少ないのですが、このまちで何か夢をかなえたい方のお手伝いが少しずつできるようになってきました。新しく設立した会社では、それを事業化していこうと動いています。

田村——さらに荒武さんへの質問です。私も東京から南伊豆町伊浜地区に引っ越してきて、協力隊で活動したのですが、地域住民の方からの暖かい支援もありましたし、逆に新規事業を始めることへの冷たい目も感じました。私も物件を譲ってもらい宿泊施設を始めるところですが、荒武さんも宿泊施設から始めたということで、何かアドバイスを頂けますか。また、宿泊施設を増やしていますが、物件を増やすに当たっては地域の方との信頼関係があった上でのことだと思いますので、そのあたりの経緯を伺えればと思います。

荒武——伊豆でいい宿仲間ができるのはとてもうれしいです。説明が悪かったようですが、最初に始めたのはシェアキッチンで、次がシェアオフィスです。シェアオフィスに人を呼び込むには、伊豆の南側では宿泊施設を用意しないと滞在してもらえませんので、せっかく自分たちのことを面白いと思って来てくれる自分たちのお客さんなのに、自分たちでおもてなしできない時間があることにモヤモヤを抱えていたところ、ちょうどおあつらえ向きの空き家物件を活用しないかという相談も頂いていたので、それならば既存の宿泊事業者とバッテリーしない領域で宿泊事業を始めようということになりました。

地域で生き残るコツは下に下に行くこと、とにかく誰よりも低く行くことを意識しています。そうすると敵対する勢力ができにくいのです。格好悪く見えるので、誰でも弱い者いじめはしないはずなのです。地域の中で一番弱い立場を自ら率先して進んで行くという処世術は、中学時代にヤンキーに囲まれながら育ってきたからかもしれません。

阿部——荒武さん、大人気で質問がどんどん来ますが、そのまま感想や他のパネリストの取り組みへの質問などがありましたらお願いします。

荒武——今回も皆さまのお話を伺って大変参考になりました。一緒に活動しているわけではありませんが、各地で活動している皆さんの発展をすごく楽しく聞かせてもらいました。自分自身が今抱えている課題とマッチする部分があるのが、ICLaの取り組みで、何か似ているのです。

フューチャーセンターが始まって10年、私たちが空き家改修の活動を始めて10年です。ICLaを利用すると想定していた学生像と今の学生との間のギャップのお話がありましたが、続けていくことで解消される部分もあるのではないかと思います。

気付きのシェアになりますが、空き家改修プロジェクトは学校の単位にもならないし、学生たちが任意で始めた学生団体ですが、同級生6人で立ち上げたものが今は130人ぐらいの団体になって、全国各地で空き家改修をしています。気付くと空き家改修プロジェクトに入りたいから芝浦工業大学へ進学するという人が増えてきているようです。今年の1年生でも河津町の知り合いの子が空き家改修プロジェクトに入って、なぜか隣町の稲取で空き家改修していますし、そういう話を伊豆にしながら耳にします。続けていくと、意識高い系から嫌だという学生ではない層の人たちが徐々に増えていくこともあると思います。インスタグラムの発信も高校生向けを意識してやっている部分もあると思いますが、徐々に意識が高いと言われる人たちだけになっていたり、その人たちが多くなっていくと、次第に少数派の方が立場が逆転することもあったり、続けていく中で変わっていくことがあると思います。運営に携わっている学生たちが、いかに回りの目を気にせずに楽しく活動できているかがすごく大事だと、学生当時を振り返りながら思っていました。

阿部——それでは宇賀田先生、質問も二つぐらい来ていますが、コメントをお願いします。

宇賀田——毎回この発表の後は、伊豆へ行きたいと思います。松崎町では深澤さんにも斎藤さんにも学生ともども育てていただきました。伊浜は私もトコリンピックのギネス認定のときにも会場にいて、非常に感慨深いものがあります。荒武さんには、この1年にも「これ、できる？」みたいな話をしてしまいました。本当にこのご縁を大切にしたいと思います。

山口さんからの質問に十分な回答ではありませんが、フューチャーセンター絡みで今年（2023年）島田市内の高校と連携した例をお話しします。島田市内の企業からパンの商品開発を静大の学生とやりたいというお話がありましたが、せっかくなので島田の高校に声をかけてやることにしました。1年半ぐらいかかりましたが、アウトプットするイベントを文化祭にしました。高校生がそこに向けて頑張れるイベントを設定した方がいいと考えたのですが、文化祭に向けてこれをやろうとなったら、最後の数カ月に急にエンジンがかかりました。こちらの都合で、年度内に報告書を書くために1月ぐらいと設定するのではなく、関わる学生や高校生がいつをピークにすれば頑張れるかで目標設定すると、使命感に燃えてくる感じがしました。成功とまでは言えませんが、教訓にはなりました。

特に荒武さん、安池さん、小林さんへの質問ですが、これまで続けてきて、私が感じているような以前にはなかった壁や、関係者が取り巻く中で新しい課題があるとしたら教えてください。年間全てうまく行くことばかりではないと思いますし、今日は学生も関係者もいろいろな方が参加していますので、その中でうまく行かなかったことも共有できれば、より良いと思いますので、何か話していただけるとありがたいです。

阿部——安池さんへはチャットでも受講者の方から質問が届いています。だんだん後ろに回るとつれてたくさん質問が重なって大変ですが、よろしくをお願いします。

安池——うまくいっていないことは、コロナ禍にオンラインで始まった子ども会議でしたが、コロナ禍が開けると子どもたちが忙しくなったことです。習い事、学校の授業、家族の時間、

どれも大事なものは分かっているのですが、オンラインに出る時間さえ子ども自身が取れない、あるいは家族が取れない。外に出る機会が増えたことで、逆にリアルな場所でのリアルな体験を求められるようになりました。子どもたちもそういう経験に飢えているように感じたので、昨年（2022年）ぐらいからリアルな場所をかなり意識したのですが、裏を返すとオンラインへの参加者が減っています。子ども会議がどのようにオンラインとリアルな場所の両方をうまく使っていくかが、一つ大きな課題だと感じています。

3年前から参加させていただいて、荒武さんが言われたように、一緒に活動しているわけではないのですが一緒にやっているような気持ちになって、少しでも追い付けるようにという思いでやってきました。今回の報告で一番強く残っているのは、小林さんの謙虚さと行動力です。今日は久しぶりにお会いして刺激を頂いたので、私も謙虚さを見失わないようにしたいと思います。回りの方の力添えがあってこそできている活動だということを、今日は一番大きな学びとしていただきました。

阿部——小林さん、質問や感想が寄せられていますが、いかがでしょうか。

小林——今回もバーチャルではありますが、このシンポジウムでこうやってお話ができて、本当にうれしかったです。学部時代には宇賀田先生が本当に学生のことを思って活動されている姿を拝見していました。「私はすごい」みたいにおごりが出てしまう教員の方もいますが、宇賀田先生は違いました。私が自分ではなくて子ども第一に考えて活動したいと思ったきっかけでもあります。今回また宇賀田先生にお目にかかれて本当にうれしいです。

子ども会議の子どもたちが本当に立派な姿を見せてくれて、すごくたくさんの練習と勉強をしたのだと思います。先日のイベントでも、地元の西奈小学校の小学生で、ナレーションが好きでアナウンサーになりたいという5人にMCをしてもらいましたが、大人顔負けでやってくれました。子どもたちはシャイだったり恥ずかしかったり、直前まで心臓をバクバクさせているのですが、本番になると本当に頼もしいのです。そういう子どもの才能を引き出している子ども会議の活動を今後も楽しみに拝見していきたいと思いました。

学生時代を思い出すと、静大生は実はすごく優秀で面白い人たちなのに、すごくシャイで恥ずかしがり屋なのです。先ほど回りの人にどう見られるかを気にしがちという話もありましたが、子ども心に戻って、心臓がバクバクしても社会に出て、フィールドワークなどで交流して、自分のアイデアで何かやってみたいという学生が、今後もたくさん出てきてほしいと思いました。

阿部——私も大学の教員なので、宇賀田先生が言う、興味があって面白そうだが、自分が行くような場所ではないと思って躊躇するということは、ゼミ生などを見ても分かりますし、自分自身もいろいろな報告会などがあっても、自分が行くような場ではないと思ったりします。興味があるところに、どうやっていく決心をするのか、あるいは入りやすくするのは、取り組み自体を活発にすることとは別に考えなければいけない点だと思います。ICLaのICはインキュベーション（ふ化）につながります。産学連携だけではなく、ふ化することが大事ですが、温度が高過ぎるとふ化しません。適温があって、ぬるいぐらいが入りやすく温まりやすい。最初はぬるま湯で始まって、だんだん高くなるといったように、インキュベーションは工夫が必要かもしれないと思います。すごく活発でやる気のある学生が集まって、いろいろな連携をやっていることが、必ずしも間口を広げることにならないというのは、自治体も含めていろいろ

ことと言えるのだと思います。

今回のシンポジウムのテーマは「地域課題をめぐる取り組みの持続可能性を考える」ですが、どう引き継いでいくか、新しい人をどう入れるか。どんなに能力が高くて取り組みが熱心な人でも、学生はいつか別の活躍の場所に出ていきます。学生も地域の方々もそうですが、新しい人を入れていくことを、取り組みの成果とは別に考える必要があります。この辺は皆さんにぜひ伺いたいと思っています。キッズカフェは入りやすい配慮がたくさんあります。見学や視察を断っているとのことですが、視察する側に悪気がなくても、腕組みして見られたり写真などを撮られたりしてはたまらない。視察する側はそれが分からないのです。子ども食堂に気軽に行けるかどうか難しい問題です。そのあたりをどう考えているのか、小林さんに伺いたいと思います。

小林——ご指摘のとおり、行政の方は悪気があって来ているわけではなくて、毎日子どもの問題に取り組んでいる方が、どんな感じなのかを見たいという気持ちなのかもしれませんが、やはり浮いてしまいます。その一人二人が腕組みして見ているだけで、とても落ち着いて食べられないのです。子どもたちも、スーツを着ていたり、市役所のバッジを付けていたりが気になります。自分たちが好奇の目で見られているのは、誰にとってもあまりいい気持ちはしません。ですから私は「私服で来て、一緒にお皿を洗ってください」と言うのです。そうすれば少しでもその場になじめます。

また、特に元教員や元保育士などの方がボランティアで入ったときに、利用者の気持ちを害すことを言うてしまうことがあります。経験が長いので、子どもを見るとアスペルガーだったり、発達障害だったり分かるのでしょうが、それを本人や親御さんの前で言うてしまうのです。初対面の人にそう言われるのは保護者もすごく嫌な気分になりますし、回りにいた人たちの箸も止まってしまいます。行政の方に限らず、ボランティアの方々にも、子どもたちへの発言には気を付けてもらっています。不登校やいじめだったり、障害を持っていたり、親が外国人だったり、本当にいろいろな子どもがいますが、こちらから根掘り葉掘り聞きません。向こうから「こういうことで困っている」とか、「こういうことが最近あって」と言うてくれるのを待つというスタンスでやっています。

阿部——南伊豆町の松本さんが、六つの報告に共通しているのが「場」だと言っていました、本当にそのとおりです。どうすれば他の人を包み込むような場の雰囲気をつくれるか、どうすればその子が持っているものを出せるのか。雰囲気は簡単に悪くなりますから、そういうことに気を付けて運営されていること自体が非常に素晴らしいと思います。

今日は多くの参加者が聞いていますが、今のキッズカフェの活動の様子を見て、これだけ多くの人が関わってサポートしているなら、うまくいくだらうと考えているとしたら、それは違います。最初は孤立無援とは言わないまでも、本当に少なかったと思いますが、それが活動していく間にだんだん関わってくれる人が増えた。地域連携論というものがありますが、連携ができてから始めるのではなく、まず活動があって、そこに徐々に協力したいという人が加わってくるのです。ある時点で成功している、活発に動いている事例を見て、そこにある要素に成功の原因を見いだすのは間違いです。その活動がどのように育ってきたか、その場ができてきた経緯を知る努力も必要だと思います。

安池さんにも学生から質問が出ています。何かコメントを頂けますか。

安池——「なぜカンボジアに選んだか」という質問にお答えします。カンボジアに限らず、なぜ縁のゆかりもない島田市の六合東小学校になったのか、なぜ縁もゆかりもない二子玉川に事業所をつくったのか。全てが同じで、完全に一人の大人の思いによるものです。

一人の大人が、子ども会議を二子玉川の子どもたちに体験させたいと思った、六合東小学校の6年生に体験させたいと思った。そこに事業所が立ち上がっているのです。カンボジアも同じです。今、カンボジアで小学校をつくっている日本人がいるのですが、その方が、社員の子どもたちの力を貸してほしい、子どもたちの可能性を信じて「君たちの力が必要なのだ」と言ってくれた。それでカンボジアになりました。フランスにそういう方がいたらフランス課になったでしょう。一人の大人がどれだけ子どもたちの可能性を信じてくれるか、子どもたちを必要としてくれるかに尽きます。

カンボジア以外への事業拡大を考えているかという質問が続いていましたが、どこかの国、どこかの町、どこかの村で、子どもたちの可能性を信じてくれる大人が一人でもいれば、そこに事業所ができ、子ども会議がどんどん広がっていくと思っています。

阿部——そういうことが多いような気がします。全部ではありませんが、どんどん広がっていくように見える活動でも、上から地域や自治体を見渡して、この辺に課題がありそうだからここをカバーするという形でやってはいないと気がします。松崎町や東伊豆町や南伊豆町も、そこから提案があって、ぜひ来てくれと言われたからやっているのであって、最初から伊豆半島の南半分は人口減少が激しいからそこで活動しようとは思っていませんでした。何かの活動があって、それに対して「ここに来てほしい」「学生に見せたいものがあるから来てほしい」と言ってくれるところでやっている。行政の立場では違うかもしれませんが、何かの縁でやっているような気がします。そうでないと「その地域は課題があるから来た」と言われても、地域の方々がそれを望んでいるかどうか分かりません。今の意見とは違う意見かもしれませんが、個人的にはそう思いました。

荒武さんは、質問をたくさん受けて、質問することが少なかったようですが、何か補足はありますか。

荒武——宇賀田先生から投げ掛けられた「壁」についてですが、いろいろな仕事の話の頂くのですが、これまでを振り返ると、自分がレベルアップすると、そのレベルに応じた、できるかどうかくらいの仕事がやって来るという経験をしています。課題も同様に、何とか頑張れば解決できるくらいの課題が常に目の前にあります。25歳のときに東伊豆町に移住してきて、今、32歳になり、地域おこし協力隊にも年下の人たちが増えてきました。ずっと同じ人がいて同じ地域課題に立ち向かえるかという、そうではない気がしますので、すごくいいことだと思っています。若手が入ってくる中で、自分は地域の人たちのいろいろな支援を頂いて、この土地に長く居続けられています。今度は若い人たちがこの土地に居続けられるようにサポートしていこうと思っています。プレーヤーからマネージャーへというのは簡単な表現過ぎますが、今は、この土地で何かを長く続けていこうとしている若い人たちの支援に注力していくフェーズに来たと思いはじめています。もちろん自分たちの仕事が成り立たないとそういうことは言ってもらえませんが、地域のことと自分たちの会社のことを両輪として、どうにかしていきたいと考える日々を過ごしています。

阿部——荒武さんが抱えている仕事は、あちこちから使われていて大変です。これがうまく収

益化できていれば、今はすごく余裕があるのだらうと思いますが、多分収益化できない仕事の方が多いのではないかと思えます。われわれのフィールドワークなども実はそうで、申し訳ないと思いつつながら、替えがないのでいろいろ甘えています。でも、荒武さんが、立ち回りがうまくて器用で次々と収益化する人だったら、あまり依頼が行かなかったかもしれません。どちらがいいのか私はよく分かりませんが、さすがに大変でしょうから、もう少し収益化できた方がいいのだらうとは思いますが、その辺のアドバイスをする人は別にいるのだらうと思いつつながら、わがままを聞いてもらっています。

南伊豆町の山口さん、宇賀田先生からも投げ掛けがありましたし、何かコメントはありますか。

山口——うちの松本区長が言ったように、場づくりが非常に大切だと思いつつ、なかなか職場での場づくりができず、後輩を育てていかなければと思いつつ、自分が動いてしまうという問題に陥っています。何となく斎藤さんとその上司にも言えるのではないのでしょうか。伊浜で活動をして6年ぐらいたちますが、まだまだ知らないことも多く、何かやるたびにいろいろな方にお世話になっていて、それをどうやって返していこうかと考えているところです。壁は必ず次から次に出てきます。それが大きいのか小さいのかはありますが、それをクリアすることで達成感を味わいながら、次のステップに進んでいくのだと思っています。

今の学生の感覚は確かに宇賀田先生が言われるとおりに思いますが、われわれの職場でも同じことが言えるような気がします。公務員の職場は、どこが正解かが見えにくく、どこまでやればいいのかも見えにくい職場なので、余計に回りを回って回りに合わせていくことが強い職場だと感じていますし、そもそも日本人自体がそういう感覚をすごく強く持っている人種かと思っています。そこに新しい価値観を持ってもらうこと自体が実際には難しく、逆にその価値観を生かしていくことを含めて考えていかざるを得ないのではないかと感じています。

関係人口に関する質問がチャットで来ています。下田市や西伊豆町のスポットがアニメ「ゆるキャン」の舞台になったことで聖地巡礼行動が起こったが、それが周辺地域も含めて関係人口の増加につながったことがあるかという質問ですね。

最近に移住にしても関係人口にしても、何を目的に、あるいは何をきっかけに来るかが多様化しています。昔はある程度決まった理由ややりたいことがあって移住の道を選ぶ方が多かったのですが、今は本当にいろいろなパターンがあります。アニメの影響もありますし、地域の課題を何とかしたいという方もいますし、昔と同じような方もいます。

関係人口では、単純に少し関わりたいとか、自分の仕事の関係で地域の課題を知りたいのでここで仕事をするという方もいます。行政もその多様性に合わせていく必要がありますが、住民もそれに合わせていかないと、今後地域の暮らしを維持していくのは難しいのではないかと感じています。

阿部——そろそろまとめに入らないといけない時間になりました。チャットにも幾つか質問が来ていますが、後ほどパネリストから一言ずつお願いします。その前に六合東事業所の関係者にもぜひ一言頂きたいと思っています。*根来*さん、先ほどはありがとうございました。ご発言ください。

根来——子どもたちのつたない発表でしたが、町長さんや企業の方、大学の先生方にプレゼンできる機会を子どもたちは非常に楽しみしていました。日頃から安池さんには本当にお世話になっています。子どもたちに会社というものに取り組める機会を頂けたこと、またこのような

シンポジウムに参加できたことも本当に感謝しています。本日はありがとうございました。

阿部——こちらこそ、ありがとうございました。素晴らしかったです。拍手をし忘れてしまいましたけれども、皆さんにお伝えください。

それでは、最初の発表順で、松崎町の斎藤さんから全体の感想・最後の一言と、もしチャットに関係する質問があれば、回答をお願いできればと思います。

斎藤——本日はどうもありがとうございました。2030松崎プロジェクトでは、今日も参加している静大の松永理子さんを中心に映画づくりをしていただくなど、静大生にはずっと関わっていただいています。またフィールドワークでは、商店街で高校生の居場所づくりを行っています。高校生と静大生が一緒になって、近所から要らないものを集めてきて、高校生が居やすい場所を自分たちでつくるという活動をやってくれています。松崎町にはその年代の方々がないので非常に助かっています。

ただ、今日のテーマは持続可能性ですが、どうやって今後につなげていくのかが一番の課題ですので、引き続き静大生の皆さんにはお世話になりたいと思います。もう1点困っているのは、行政が職業的に非常に人気がないことです。特に地方はひどく、松崎町では募集しても一人も来ないことがあります。どなたか知り合いの方で、興味のある方がいたらぜひ教えてください。

質問にあった「ゆるキャン」の関係ですが、賀茂郡では西伊豆町が頑張っていて、車に「ゆるキャン」の絵を描いて走らせたりしていますが、松崎町はそれほど映っていないので、あまり力を入れてやっておらず、関係人口が増えたという話も聞いていません。

阿部——松崎町には大変お世話になっております。今までにない参加の仕方もあるかもしれませんので、よろしく願いいたします。

山口——本日はどうもありがとうございました。私は先ほどお話ししましたので、他の二人から一言ずつお願いします。

松本——今日はありがとうございました。今日、いろいろと考え方を整理できたのが小林さんのお話でした。藤原ひろのぶさんの『買い物は投票なんだ』という本がありますが、小林さんの話を聞いて、ESG投資という考え方で少し理解できそうだと思います。先ほど宇賀田先生がおっしゃった共感という発想が、そこから生まれてくるのではないかと思います。地域課題を解決するには外の力も重要ですが、少数だろうが高齢だろうが、そこに自分事で考える人がいないと駄目だということを改めて発見しました。地元学ということを静大から教わったという話をしましたが、地域の宝を発見し磨いて組み合わせる価値を創造していくのだということも思い出しました。この2~3時間は非常に実り多い時間でしたが、また頭を抱えながら帰らなくてはならないというのが今の実感です。

田村——本日はありがとうございました。住んでいる地域や子どもたちのために、皆さんがそれぞれのフィールドで活躍されていますが、今回のテーマの持続可能のためには、今回のディスカッションであったり、インスピレーションをお互いに影響し合ったりすることが、何よりも今後の私たちの活動に大事だと思いました。皆さんの活動の中で面白い・自分でも取り入れようと思ったものを、自分なりに消化して次につなげることが、何よりも素晴らしいと思います。

したので、またぜひよろしくお願いします。

阿部——伊浜にもまた遊びに行かせてください。

田村——ぜひお願いします。お待ちしております。

荒武——この度も大変お世話になりました。ありがとうございます。さまざまな挑戦を重ねている皆さんとこういう場をご一緒できて、正解はないけれども、やり続けないと見えてこない世界があると思いました。何かしらの壁はありますが、工夫しながら挑戦していくことで、つくってける未来があるということを、皆さんのお話を伺って感じることができました。その挑戦者の一人として、これからもしっかりと着実にやっていきたいと思います。

安池——本日はどうもありがとうございました。「会社を退職した後も関わってくれている人はいますか」という質問を頂いています。小学校5年生で入社した社員が、中学生になって部活などで忙しく、会議には出られませんが、年下の社員に手紙を書িয়েくれたり、会議の際にランチミーティングのように入ってくれたり、何かしら関わってくれている人はいます。持続可能というテーマにつながってくると思いますが、先日あるラジオで社員たちがインタビューを受けた際に、「大人になったときの夢はないけれども、大人になっても子ども会議には関わっていきたい」と言ってくれたときには、やってきたかいたったという気がしまして、こうして次の代の子どもたちに子ども会議を引き継いでいけたらと思いました。子どもたちはたくさん可能性を持っていますので、いろいろなところで子どもたちの活躍する機会をつくっていただけたら大変うれしいです。

小林——パーソナルな感想ですが、私は静大に行って本当によかったと思っています。静大時代は阿部先生、宇賀田先生、日詰先生はじめ本当に素晴らしい先生方に恵まれました。私は勉強が大好きで、オタクみたいに大量の授業を履修していたのですが、大好きな勉強に打ち込めた静大時代が本当に懐かしくて、静大の皆さんとバーチャルではありますが、こうやって同じ時間を過ごせて、懐かしい気持ちとともに今日は参加させていただきました。今日参加している静大生の皆さん、ぜひぜひ自分の好きなことに打ち込む学生時代を送ってください。先生方みんながサポートしてくれるはずですので、いろいろ挑戦してほしいと思います。またどこかでお目にかかるとうれしいです。今日は長時間ありがとうございました。

阿部——私も最後のコメントをさせていただきます。私は26年か27年目ぐらいになりますが、来年（2024年）3月で課題を山積みにし、壁にぶつかって登れないまま、退職という形で卒業しますが、公開シンポジウムは何らかの形でセンターの方でやっていくと思いますので、ご協力いただければありがたいですし、引き続き参加いただきたいと思います。私は一参加者として参加して、一生懸命チャットで質問すると思います。どうすれば続くのかと、個人的な立場を考えて、持続可能をテーマにしました。

毎回、それぞれの取り組みの進み具合や新たな課題を聞き、新たなチャレンジをするパネリストの皆さんの活動にすごく刺激を受けて、学生たちにはとてもいい学びになりますし、地域からの参加者にとっても、静岡大学はこういうことに関わっているのだということで、いい影響というか、いい広報になるのではないかと思います。

活動への入り方には注意点がありますが、報告してくれた方々で、全くクローズドとなっているところはありません。しっかりした心構えがあれば参加できる取り組みが多いので、ぜひお声掛けいただければと思います。クリスマスを過ぎましたが、私にとってはこれが非常に良いクリスマスプレゼントになりました。

パネリストの方々ありがとうございました。参加者の方々には十分な質疑応答の時間が取れずに申し訳ありませんでした。今年度もご協力ありがとうございました。皆さん良いお年を。ありがとうございました。

宇賀田——最後にしゃしゃり出るようですが、この場をつくっていただいたのは阿部先生です。いったん卒業ということですので、阿部先生に感謝を申し上げたいと思います。皆さん、拍手をお願いします。

阿部——皆さん、ありがとうございました。

地域課題解決支援プロジェクト・各地の進捗状況

■松崎町

□フィールドワーク

松崎町は、地域課題解決支援プロジェクトにおいて最も早くから組織的に関わった地域であるが、2016年からは地域創造学環フィールドワークの受け入れ地となった。フィールドワークは「商店街のにぎわいの創出」「観光と防災の両立」の2テーマで実施され、現在は3年生6名の体制で実施されている。2024年度のフィールドワーク日程は以下の通りである。

○フィールドワーク・商店街グループ

・5月17-18日、6月28-24日、7月14-15日、10月11日、11月15日、1月17日

○フィールドワーク・観光と防災グループ

・5月8日、6月15-16日、8月3日、12月12日、1月17日

□2030松崎プロジェクト

静岡大学（未来社会デザイン機構）、松崎町、松崎町観光協会、伊豆半島ジオパーク推進協議会が連携し2020年末から始めたプロジェクトで、フォーラムやワークショップ、13のゴールに分かれたグループによる活動、松崎高校の探究学習「西豆学」との連動事業、コミュニティスペースふれあいとうふや。での「ぶらっとカフェ」、「風待ちカフェ」等が実施され、プロジェクトについては中間報告会、最終報告会等も実施された。

■東伊豆町

東伊豆町における取り組みは、地域課題解決支援プロジェクト（第1期公募）への応募、同地を会場とした公開シンポジウム、東伊豆ガイドツアー等の実施を経て、2017年度後期からフィールドワーク受け入れへとつながった。2024年度のフィールドワーク日程は以下の通りである。

□フィールドワーク「新しい観光スタイルの発掘・創出」

3年生5名の学生が東伊豆フィールドワークを実施中である。これまで実施されたフィールドワークの日程は以下の通りである。

・5月25-26日、7月20-21日、9月19-20日、11月23-24日、2月3-4日、2月23-24日

□フィールドワークから派生した取り組み

下記のようにフィールドワークから派生した取り組みも行った。

・稲取高校校外研修（静岡大学訪問・交流会）への支援・協力（6月21日）

・御殿場南高校校外研修（静岡大学訪問・交流会）への支援・協力（7月3日）

・伊豆伊東高校校外研修（静岡大学訪問・交流会）への支援・協力（10月29日）

（※以上の高大連携事業はいずれも東伊豆フィールドワークでの活動から展開したものである）

・東伊豆魅力大会議（2月24日）

・東伊豆学生サミット（3月17日、ハイブリッド方式による開催）

・首都圏の高校との高大連携フィールドワーク（3月17-19日）

■南伊豆町

南伊豆町では、第2期公募に対する課題提案をきっかけに地域創造教育センター、大学教育センターの教職員が商店街空き店舗やサテライトオフィスの視察、伊浜地区のまち歩き等を行った。その後、地域創造学環の学生や静大FCのメンバーが南伊豆町で展開する地域活性化の取り組みに参加したり、伊浜地区での地域人材育成事業に参加するなど関係を深めている。昨年度末から今年度にかけて下記の事業を行った。

- ・南伊豆町役場との共同調査事業の打合せ及び伊浜地区訪問（9月6日）
- ・トコリンピック in 伊浜参加（9月29日）

■伊豆半島全域（ジオパーク）

□フィールドワーク

伊豆半島ジオパーク推進協議会からの提案課題は、地域課題解決支援プロジェクト（第1期）のモデル事業に選定され、いくつかの事業が展開した。地域創造学環が開設されてからは、伊豆半島全体をフィールドとするフィールドワークが展開しており、3年生3名が活動している。2024年度の取り組みの日程は以下の通りである。

- ・4月13-14日、5月8日、5月27日、5月29日、5月31日、6月6日、6月15-16日、7月22日、9月10-11日、10月13日、10月16-17日、10月27日、11月16-17日、12月21-22日

□コラボラティブワークス

グローバル共創科学部が2023年に開設され、コラボラティブワークスという名称のフィールドワークが始まっている。2年生18名が活動している。

○地域の自然と社会を総合的に捉えるサステナビリティアクション

- ・4月13-14日、6月15-16日、11月16-17日、12月21-22日、3月8日

○まちづくりと融合した地域福祉を考える

- ・5月9日、6月15-16日、10月12日、11月9-10日、2月14日、3月17日

■御前崎市

課題提案自治体の一つである御前崎市では、2018年度から「御前崎市スポーツ振興プロジェクト～スポーツによる交流人口の拡大と産業振興の推進～」をテーマとした地域創造学環フィールドワークが展開し、今年度も3年生3名が活動している。2024年度の活動日程は以下の通りである。

- ・6月20日、9月10日、11月1日、11月23-24日

■賀茂キャンパス

静岡大学、静岡県立大学、静岡文化芸術大学等、県内大学が賀茂地域で様々な活動を展開できるよう、静岡県・賀茂地域局は2022年1月、下田市に「賀茂キャンパス（賀茂地域大学交流拠点施設）」を開設し、賀茂キャンパス活用推進委員会を実施した。

今年度は賀茂地域における各大学の事業を支援するとともに、賀茂キャンパス活用推進委員会に参加した。

■藤枝市役所

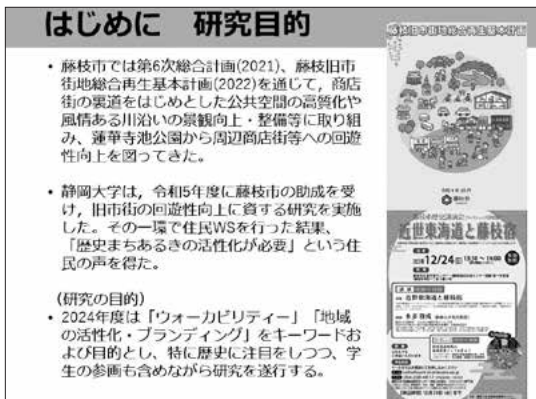
藤枝市都市政策課から「ウォーカービリティ」「地域の活性化・ブランディング」をキーワード

にした課題提案があり、委託事業「ウォーカービリティを意識した地域の活性化・ブランディングに関する民俗学的・地理学的研究」を行った。

調査報告

ウォーカービリティを意識した地域の活性化・ブランディングに関する民俗学的・地理学的研究

山本隆太（静岡大学地域創造教育センター准教授）
 辻本侑生（静岡大学地域創造教育センター講師）
 伊藤蒼生、小園明璃、加藤希彩、小谷心海、
 坂本佳紀、清水萌衣、中山将吾、生田目藍琉、
 西田船十、森口真帆、大村卓人、田林花菜子、
 豊島幸絵、伊藤さな（静岡大学学生）

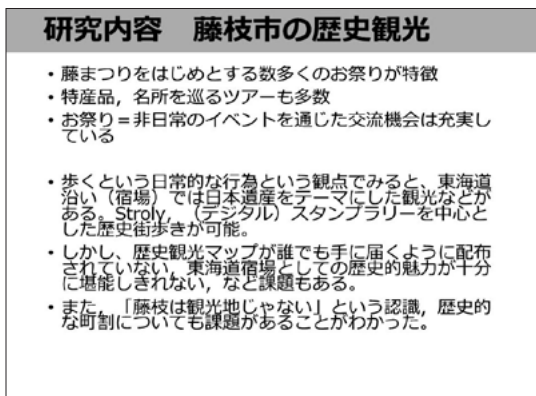


本研究について、静岡大学の学生が発表します。

藤枝市では第6次総合計画、藤枝旧市街地総合再生基本計画、を通じて、商店街の裏道をはじめとした、公共空間の高質化や風情ある川沿いの景観の向上や整備などに取り組んできています。その結果、蓮華寺池公園から周辺商店街などへの回遊性の向上が図られてきました。静岡大学は令和5年度に藤枝市の助成を受け、旧市街の回遊性向上に資する研究を実施しま

した。その一環で、近世、東海道と藤枝宿という住民向けワークショップを行いました。地元の方から、歴史歩きの活性化が必要だという意見が出されました。

本研究ではこうした地元の声を受け、新たにウォーカービリティや地域の活性化、ブランディングをキーワードおよび目的とし、また、特に歴史に注目をしつつ、学生の参加も含みながら研究を行いました。



藤枝市の観光及び歴史観光について、概要を紹介します。藤枝市では、藤まつりをはじめとする、数多くのお祭りが行われていることが特徴です。またお茶を中心とした特産品や、蓮華寺池公園などを巡る名所のツアーも数多く展開されています。こうした取り組みからは、お祭りという非日常のイベントを通じた、観光の交流、機会が充実していることが伺えます。

その一方で、「歩く」という日常的な行為という観点からすると、東海道沿いの旧市街である宿場では、日本遺産をテーマにした観光などが行われています。また、ストロリー、デジタルスタンプラリーを中心とした歴史街歩きも

行われています。しかし、歴史観光マップが訪問客にとって容易に手に届く範囲にないといった課題や、東海道宿場町を歩いてみても、その歴史的な魅力が十分に伝わってきにくい、などといったような課題があります。

さらには、住民の意識として、藤枝は観光地じゃないという認識が比較的、一般的であったり、歴史的な町割りについても課題があることが判明しました。



本研究では、歴史の町をあるく、ウォークするという観点から、歴史、街歩きの魅力を向上させたいと考えています。

現在、日本各地で歴史街歩きの取り組みが盛んです。左上は東京の中央区にある八丁堀の地図です。1632年から現在にかけて、町がどのように移り変わってきたのかが地図で見ることができます。かつての水路が埋め立てられ、その一部は高速道路に使われるなど、町の発展の歴史を歴史地図から読み取ることが

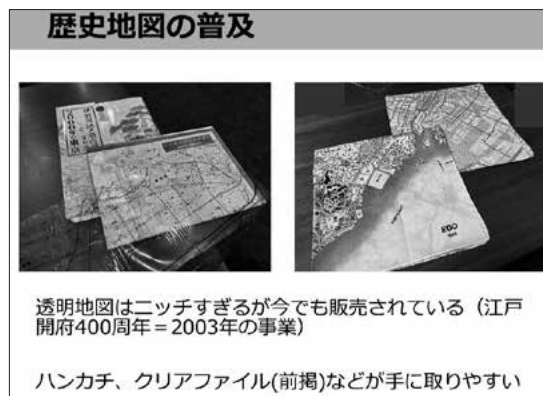
できます。

また、右側のディズニーランドの付近の写真は、スマートフォンでウェブ上の歴史地図を開いてみたところです。ここはいわゆる、三角州という場所であることが分かりました。

こうした、「名所ではないけど歴史の移り変わりを感じ取ることができる」ような歴史街歩きが近年、人気だと言えます。

続いて、長野県松本市や愛知県豊橋市でも、近年、歴史街歩きのための歴史地図の復元が進められています。松本市の地域住民は、かつて、「この町にはお城しかない」と認識していましたが、こうした歴史地図を作成することによって、歴史の価値に気がつく人が増えました。特に、現在では、松本市博物館の中にジオラマが再現されていますが、地図がその基礎的な資料ともなったこともあり、歴史街あるきの人気も出ています。

右の愛知県豊橋市では、かつての吉田城の町割りを現在の地図の上に復元したものがあり、クリアファイルとしてミュージアムで販売されています。クリアファイルという日常的に使う文具にすることによって、身近なものになっているといえますし、またお土産として渡しやすく、渡された人は豊橋市について思いをはせることも増えていると思われま



東京では、左の写真のように歴史地図に透明な現代地図を重ね合わせる、という地図も販売されています。

また、歴史地図のハンカチの販売が行われていたこともありました。左側のハンカチは1843年の江戸の時期の東京湾のあたりを示しています。右の現代地図のハンカチと比べると、江戸時代にはなかった月島や豊洲といった埋め立て地が広がっていった様子が、ハン

カチを並べることで一目瞭然となっています。これは日本人のみならず、海外の方にとっても非常に魅力的なお土産です。こうしたハンカチという形での歴史地図の展開も、観光を考える上では重要ではないかと考えられます。

歴史街歩き開発に向けた地図資料

東海道分間延絵図（1806）



藤枝宿往還家並絵図（1842）



さて、歴史街歩きの開発に向けては、まず地図の基礎的な整理や分析から始めました。藤枝宿を対象としましたが、東海道分間延絵図と藤枝宿往還家並絵図の2種類がよく知られています。本研究では、最終的に観光利用したいという目的もあるため、「歩くために作られた地図」とも言える延絵図を資料として使うことにしました。

A) フィールドワークとGISによる変形

- フィールドで町割りの痕跡 = 街路、水路、橋の痕跡を探して位置情報を取得する（GPS）
- 取得した位置情報に基づき、東海道分間延絵図を現代の地図に貼り付ける（ジオリファレンス）
※東海道沿いのみ

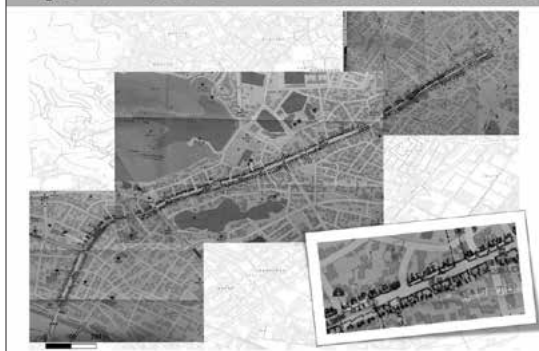


学生のフィールドワークは2回行いました。1回目はフィールドワークで町割りの痕跡を探し、取り組みをしました。町割りの痕跡は町の区界であったり街路や水路、あるいは橋の痕跡を探しながら街を歩きます。それらを見つけたら、その場所でスマートフォンで位置情報を取得し、記録をしていきます。

フィールドでとった記録をもとに、絵図を現代の地図に張り込む、ジオリファレンスという手法をとりました。この方法によって、現

在の道路の形と絵図をマッチングしたものが下の地図になります。しかし、町割りが一部不明瞭なところもあるため、精度に課題が残りました。そのために、すぐには街歩きのマップとして使うことが難しいことが分かりました。

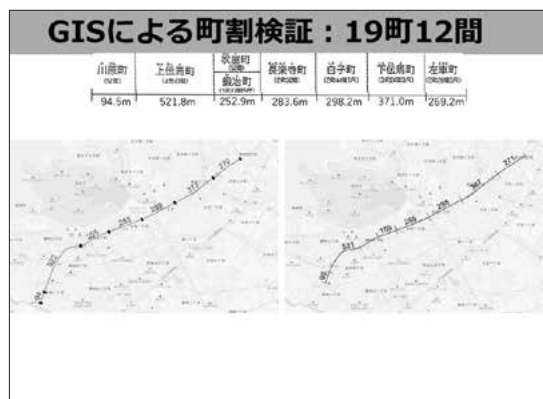
B) フィールドワークによる建屋の推定



次に絵図に書かれていた町屋をカウントし、数を数えました。それを、現在の藤枝に当てはめていくという手法を試してみました。その結果がこの地図となっています。

この地図においても、町割りの境目がわからない箇所があることや、間口の広さがバラバラになってしまうことなど課題はありますが、観光に向けては、観光客の人が東海道の宿場のイメージを持つことがまずは大切であることからこうした、アプローチもありえるかも

しれないと考えられます。最終的には先ほどの手法と、こちらの手法をより精度を上げて合致させていながら、現在の地図の上に古い歴史の地図を復元するという方法を取りたいと考えています。この点は本研究の課題として残りました。

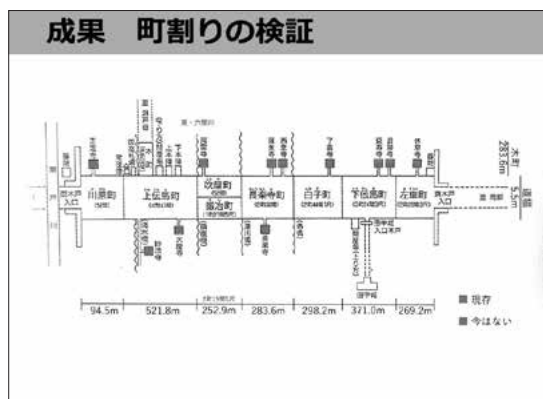


藤枝宿は、東の木戸から西の木戸まで8つの町があり、その全長は19町12間とされています。次のスライドで紹介しますが、街道筋の吹矢屋町と鍛冶町は一つの町としてカウントしているので、現在、区分が表示されているスライドは7つの町の区分となっています、

左側の地図は、現在の瀬戸川の辺りに西木戸があったと想定して、町割りを描いたものです。かつての西木戸は、現在の堤防の上になかったと推測されるため、左側の地図は間違っ

ている可能性が高いのですが、しかし、例えば^{かみでんまちょう}上伝馬町の東端が現在の六間川にかかる橋、とされていますが、たしかにその通りになっており、整合的になっています。

右側の地図は、東木戸の場所を起点として、そこから19町12間の距離をとったものです。東から数えていくと、西木戸のあたり、つまり、95の数字の西側に当たるわけですが、それが正定寺よりも東にきてしまい、ほかの歴史資料と整合しません。また、先ほど述べた上伝馬町の東端である六間川が、まちの境目にならないという、矛盾もあります。



さて、この町割りの図は、藤枝宿の町割りを紹介する際によく出てくる図となっています。今回の研究でははっきりとしたことがまだいえないのですが、今後の研究を通じてこの町割りの図に関して、なんらか、示唆を与えられるような研究成果が出ると望ましいと考えています。

民俗学の視点から

- 藤枝市を初めて訪れる外部の研究協力者（ラポラトリ文鳥・田辺裕子氏）とともに、歴史的町並みを意識しつつも、先入観を持たずに歩き回った。
- まちあるきで得た気づき（一部）
 - ✓ 現在すでに整備されている蓮華寺池公園周辺に加え、飽波神社～蓮華寺池～田中城あたりを訪問客が回遊するよう、誘導する仕掛けが必要なのではないか。
 - ✓ 具体的には、歴史研究の成果を活用し、ストーリーをつくることも考えられる。例えば城に通う下級武士が歩いていた道を体感するストーリーなどはどうだろうか？

は歴史地理的な研究が進んでからとなりますが、そうした歴史地理の研究成果を踏まえたストーリー作りも観光に寄与することが示唆されました。例えば、下級武士が田中城に向かって歩いていたところを追体験するような観光ストーリーがありえます。

ここまで、歴史地理的な観点を重点的にご紹介をしてきました。本研究は、民俗学の視点も取り入れて行いました。

地理学が場所を空間的に捉えるのに対して、民俗学はそこに住む人の目線で捉えていく点が特徴になっています。今回は外部の民俗学研究者を招き、実際に藤枝の宿場を歩き、民俗学的な視点から考察を加えました。

飽波神社、蓮華寺池、田中城辺りを回遊するような仕掛けが必要であること、また、これ

成果と課題

- 1) ウェブGIS上でうごく歴史地図は作成できる
 - 東京での歴史街歩きに使われるmapmap.tokyo主宰者山本氏を招聘し、歴史地図のGIS作業プロセス、オープンデジタル化（タイル表示の提供）について情報提供を得た。
 - 自分たちで歴史地図をつくる工程から取り組む必要がある。この点については今後、地元の中高生を交えてクラフトマップ的に取り組みたい。
- 2) 古地図の復元（途上）
 - 藤枝の東海道分間延縁の区間を現代の地図に重ね合わせ、歴史を可視化するという方法をとった。しかし、町割りの区界が不明などの課題が残った。
 - 今後、旧版地形図、都市計画図などの実測図を積算する歴史地理学的な地図の重ね合わせの手法を用いて検討する必要があることが判明した。
- 3) 藤枝宿歴史街歩きの可能性 まちをあるく
 - 将来的には、歴史地図を片手に歩き回り、宿場町ならではの細かな区割り、曲がりくねった道などから歴史の片りんを感じ取る歴史街歩きができるような研究的な側面から整理したい。
 - これを踏まえて、「城に通う下級武士が歩いていた道を体感する」などの特色を持たせた日常的な歴史街歩きもありえる。

成果と課題について以下にまとめます。

1つ目は、WebGIS上で動く、歴史地図の作成に取り組みはじめることができました。冒頭で紹介したマップマップ東京の作成者から情報を得ながら、今後は自分たちで歴史地図を作成していくとともに、地元の中高生を交えて、クラフトマップ的に自分たちの地図を作る、という取り組みについても検討をしたいと考えています。自分たちで作成することで、著作権の問題もクリアできると考えています。

2つ目は古地図の復元についてです。自分たちで地図を作成すると言ってもやはり、歴史学的な考察は不可欠です。今回判明した課題について、引き続き、歴史学的な調査を進めるとともに、歴史地理学的には、八丁堀の事例のように、過去の歴史上の地図を積み重ねていながら街を復元する手法が一般的です。本研究では時間の関係で、現在の地図と江戸後期の地図を重ね合わせましたが、今後は時間をかけてより精緻に取り組む必要があります。

3つ目は、上記の2つの課題を解決しながら歴史街歩きを進めたいと考えています。民俗学の視点からも出たような、城に通う下級武士が歩いていた道を体感するといった体験型観光も検討していきたいと思えます。

市への提言

- ・ウォークラブルなまちづくりを推進するにあたって、青森県弘前市は人口規模が藤枝市と近く、また大学との関係を大切にしている「学都」的な性格も共通しており、藤枝市との関係人口や教育を踏まえた街づくりの推進を行う上で参考となる可能性が高い。
- ・青森県黒石市は人口3万人を切る小規模自治体だが、同じく城下町であり、歴史資源を活かしたまちづくりを進めるとともに、ウォークラブルなまちづくりを推進するにあたって、新たな交流施設（「よこまち交流館」）が開設されたことで、新たに子どもたちの歩行動線がみられた。
- ・住民主体の歴史まちづくりについては、南木曾町では戦後の社会教育を中心とする住民自治の取り組みが実を結んでいる。近年では松本市や豊橋市も参考になり、豊橋市内の宿場町は歴史地図をクリアファイルにして販売しており、教育現場でも観光でも手に取りやすくしている。これらの取り組みは参考になるとともに、歴史ウェブでの提供として、藤枝市GISに歴史地図を実装することも考えられる。また、歴史地図ハンカチなどは土産としても価値がある。

最後に本研究を踏まえての市への提言は以下の3つです。

1つ目は、ウォークラブルなまちづくりを推進するにあたって、青森県弘前市は人口規模が藤枝市と近く、大学との関係を大切にするとともに共通しているため参考になると思われます。

2つ目は、青森県黒石市は人口3万人を切る小規模自治体ですが、新市役所庁舎と新たな交流施設を開設して、子供たちの歩行動線が新しくなるなどの取り組みも見られています。

3つ目は、住民主体の歴史まちづくりについては、南木曾町の奈良井宿が、住民自治を中心とした歴史まちづくりとしてよく知られていますが、近年の松本市や豊橋市も参考になります。歴史GISは藤枝市が持っている「藤枝市、GIS」に統合することで、安定的に、歴史地図サービスを提供できると考えられます。またハンカチやクリアファイルなども、お土産として優れていると思われます。こうした開発に期待が寄せられます。

以上で発表を終わります。ご清聴いただきありがとうございました。

(本研究は「藤枝市地域政策研究・創造事業 令和6年度採択事業」である。

2025年3月5日に行われた「令和6年度 藤枝市地域政策研究成果報告会」での報告を掲載した。)

地域創造教育センターと地域課題解決支援プロジェクト

静岡大学地域創造教育センター
地域人材育成・プロジェクト部門長
山本 隆太

地域課題解決支援プロジェクトは、地域が抱える課題と本学の学生・教員の持つ研究教育とをマッチングし、地域と大学の協働による課題解決を推進・支援する事業です。県内各地の自治体や団体に対して、大学とともに取り組みたい地域課題を公募し、当センターがヒアリングをした上で課題をリストアップします。その課題に対して関心や研究資源を持つ学生・教員をマッチングし、仲介や派遣を行なっています。初回の課題公募は2013年度末に行い、27件の地域課題を掲載しました。第2期は2016年度以降に公募した16件であり、現在、全43件となっています。

11年前に始まったプロジェクトですが、第1号の成果報告書では「松崎町役場」「伊豆半島ジオパーク推進協議会」からの提案を軸とした、伊豆半島の課題についての成果報告がなされています。これらの課題がきっかけとなり、現在にもつながっている取り組みの一つが地域創造学環の必修科目フィールドワークです。松崎町、伊豆半島ジオパーク、東伊豆町などのフィールドは地域課題解決支援プロジェクトの中から選定されました。2023年にグローバル共創科学部が開設されると、その活動はコラボラティブワークスと名前を変えながら継承されています。地域課題をきっかけとして、地域と大学が継続的に協働しています。

この間、本部門の位置づけも変わりました。当初、イノベーション社会連携推進機構・地域連携の生涯学習部門でしたが、2017年からは地域創造教育センターの一部門になりました。2020年には、地域と大学との対話を通し、バックキャストで地域社会と大学のあり方を構想するプラットフォームである未来社会デザイン機構が設立され、当センターは機構の一員になりました。こうした組織改編を経ながら、地域と大学の連携はますます活発になっています。松崎町と本学は協定を結び、地域創造学環フィールドワークに加え、2030松崎プロジェクトを中心に連携を強めています。

地域創造教育センターの役割の一つは地域人材育成に資することですが、その機会は大学開放、生涯学習支援や研修事業で行われる地域人材育成、地域創造学環での学生に対する地域人材育成に留まりません。地域の課題を通じて、大学の学生・教員が地域の人々とともに学ぶことが基本です。

地域課題解決支援プロジェクトは大学が地域づくりの担い手・パートナーになろうとする取り組みです。これまで同様、地域の皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

静岡大学
地域課題解決支援プロジェクト成果報告書 第10号

発行日— 2025年3月24日

発行— 静岡大学地域創造教育センター

編集— 大谷悦子

連絡先— 静岡大学地域創造教育センター 地域人材育成・プロジェクト部門

〒422-8529 静岡県静岡市駿河区大谷836

☎054-238-4817 E-mail: kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp

ウェブサイト— <https://www.lc.shizuoka.ac.jp/>

印刷— 株式会社三創